

題字 故前田和二郎名誉教授  
発行所  
東京都新宿区信濃町35  
慶應義塾大学医学部  
外科学教室同窓会(刀林会)  
発行人 松本純夫

# 外科学教室100周年祝賀会を終えて



一般社団法人慶應義塾大学医学部  
外科学教室同窓会(刀林会)理事長  
松本 純夫 (52回)

令和5年(2023年)3月5日(日)にコロナ流行の為3年遅れではあったが、外科学教室創立100周年記念祝賀会をザ・オークラ東京平安の間で執り行ったことに同窓会理事長として心から嬉しく思います。2020年2月3日に横浜港に到着したクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」の乗客に複数の陽性者がいたのを契機の一つとして日本に上陸したCOVID-19流行拡大は想定以上の規模であり、私たち日本人はそれから3年余にわたり社会全般の行動変容を強いられました。

フレミング博士のペニシリンの発見が1928年であったことを考えると、100年前の外科治療に関わる衛生的環境を整えること自体が難しいと容易に想像できます。石炭酸をガーゼに噴霧し創部を消毒するリスター式防腐法は1869年に蘭医ドードインにより大阪に紹介されていたと文献にあります。1924年奉直戦争看護班長として奉天に出張していた初代茂木教授は手術時に負傷し、敗血症に至って一時危篤を奉ぜられたと記録にあります。その苦勞は如何ばかりであったかと思えます。当時は洋の東西を問わず虫垂炎は致命的な疾患でありましたし、茂木教授が日本外科学会の宿題報告として講演したと記録があります。

麻酔もエーテルやクロロホルムなど揮発性麻酔薬がいろいろ使用されていた時代です。過酷な環境にも関わらず外科学の進歩に貢献された先達に改めて敬意を表します。さて、同窓会名称である「刀林会」は初代の茂木教授と木村助教の姓から「木」を取って付けたと古い同窓会誌に記録があります。祝宴で乾杯発声の役に指名頂いた小生は、挨拶の中で「木」と言う漢字語源には諸説あるが、その象形は地に芯を持つて立つ姿を表し草との違いを示す。刀はメスに通じ、よってメスを

持つて身を立てる意味に通じると考えます。同窓会の名称として他に変わるものがないほどに良いものと感じています。多くの同窓の士がメスを持つて身を立てる目標に向かって集う会でありたい」と述べました。その名を掲げつつ創立100周年を祝うこと、統合と

分化は歴史の必然ですが、大教室制の良さを保ちながら同窓会組織を運営していく必然性を会員一同に理解いただけるのであれば幸いです。祝宴で乾杯発声しました。刀林会が次の100年をどのように迎えるのか、想像するだけでも高揚する気持ちを抑え切れなれど感じています。今後の発展・繁栄・成功を祈ります。

2023年3月5日、東京虎ノ門のザ・オークラ東京「平安の間」において、慶應義塾大学医学部外科学教室100周年記念祝賀会を開催いたしました。1920年に外科診療が開始されてからちょうど100年にあたる2020年6月に盛大な記念祝賀会を行う予定でしたが、COVID-19感染拡大の影響で延期を余儀なくされました。2020年12月26日の100周年記念講演会(ザ・オークラ東京からweb配信)を経て、3年越しに100周年記念祝賀会を大きなトラブルもなく開催できましたのは、ひとえに刀林会の皆様方の温かいご支援とご協力の賜物と深く感謝申し上げます。当日、現地での参加者数は368名およびWebでの参加者数は110名となり、大盛況のうちに会を終えることができました。

会に先立ちまして、慶應義塾ワグネル・ソサイエティ・オーケストラによる混声合唱と演奏で、皆様をお迎えし、本会の司会はフリーアナウンサーの木佐彩子様をお願いいたしました。まず私が準備委員会委員長として開会のご挨拶をさせていただきます、続いて日本外科学会理事長 池田徳彦先生、慶應義塾常任理事 天谷雅行先生、慶應義塾大学医学部長 金井隆典先生、慶應義塾大学病院院長 松本守雄先生よりご祝辞を賜りました。引き続き、NHK交響楽団メンバーによる素晴らしい四重奏が演奏され、皆様に格別な感動を味わいました。次の100年に向けて外科学教室のさらなる発展を願って、日頃大変お世話になっております40名の方々に鏡開きを行っていただいた後、一般社団法人慶應義塾大学医学部外科学教室同窓会(刀林会)理事長 松本純夫先生にご挨拶と乾杯のご発声をお願いいたしました。ザ・オークラ東京の美しい料りに舌鼓を鳴らしながら、4診療科合同で作成した30分の100周年ビデオを上映いたしました。ビデオでは、外科学教室100年の歩みをととみに、各診療科の歴史や臨床・研究の紹介がなされました。70病院も関連病院からお祝いの言

葉とともに頂戴した集合写真をご紹介します、最後に次の100年を担う11名の若手外科医から寄せられた熱いメッセージを上映いたしました。彼らの「外科医として成し遂げたいこと」をテーマにした力強いメッセージに、多くの皆様の胸が熱くなったことと思います。会の終盤には、外科学教室の黒田達夫教授(小児)、浅村尚生教授(呼吸器)、志水秀行教授(心臓血管)より主催者挨拶をいたしました。2023年3月で退任された黒田達夫教授、浅村尚生教授に向けて、感謝の想いを形にしたサプライズビデオが上映され、後任の藤野明浩(現)教授、朝倉啓介(現)教授からそれぞれ黒田教授と浅村教授への花束贈呈とともにご挨拶をしていただきました。引き続き、応援指導部による若き血演奏、および熱いエールを頂戴し、改めて義塾の強い団結力を感じることができました。最後に「命と向き合い外科医として生きる」ビデオメッセージとともに、私から中締め挨拶を行い、会は成功裏に終えることができました。さらに今回、2020年の日本外科学会定期学術集会で叶わなかった皆様との写真撮影ができましたことは望外の喜びです。

新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行前ではございましたが、クラスター発生等の大きな問題もなく、盛会に終えることができましたのは、刀林会の皆様、視聴くださった皆様のご尽力があったこそと改めて心より感謝申し上げます。100周年祝賀会を盛会裏に終えることができましたことを励みとし、今後も慶應義塾大学医学部外科学教室の発展のために尽力して参る所存でございます。今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

# 外科学教室100周年祝賀会を終えて



慶應義塾大学医学部  
外科学(一般・消化器)教授  
北川 雄光 (65回)

2023年3月5日、東京虎ノ門のザ・オークラ東京「平安の間」において、慶應義塾大学医学部外科学教室100周年記念祝賀会を開催いたしました。1920年に外科診療が開始されてからちょうど100年にあたる2020年6月に盛大な記念祝賀会を行う予定でしたが、COVID-19感染拡大の影響で延期を余儀なくされました。2020年12月26日の100周年記念講演会(ザ・オークラ東京からweb配信)を経て、3年越しに100周年記念祝賀会を大きなトラブルもなく開催できましたのは、ひとえに刀林会の皆様方の温かいご支援とご協力の賜物と深く感謝申し上げます。当日、現地での参加者数は368名およびWebでの参加者数は110名となり、大盛況のうちに会を終えることができました。

会に先立ちまして、慶應義塾ワグネル・ソサイエティ・オーケストラによる混声合唱と演奏で、皆様をお迎えし、本会の司会はフリーアナウンサーの木佐彩子様をお願いいたしました。まず私が準備委員会委員長として開会のご挨拶をさせていただきます、続いて日本外科学会理事長 池田徳彦先生、慶應義塾常任理事 天谷雅行先生、慶應義塾大学医学部長 金井隆典先生、慶應義塾大学病院院長 松本守雄先生よりご祝辞を賜りました。引き続き、NHK交響楽団メンバーによる素晴らしい四重奏が演奏され、皆様に格別な感動を味わいました。次の100年に向けて外科学教室のさらなる発展を願って、日頃大変お世話になっております40名の方々に鏡開きを行っていただいた後、一般社団法人慶應義塾大学医学部外科学教室同窓会(刀林会)理事長 松本純夫先生にご挨拶と乾杯のご発声をお願いいたしました。ザ・オークラ東京の美しい料りに舌鼓を鳴らしながら、4診療科合同で作成した30分の100周年ビデオを上映いたしました。ビデオでは、外科学教室100年の歩みをととみに、各診療科の歴史や臨床・研究の紹介がなされました。70病院も関連病院からお祝いの言

葉とともに頂戴した集合写真をご紹介します、最後に次の100年を担う11名の若手外科医から寄せられた熱いメッセージを上映いたしました。彼らの「外科医として成し遂げたいこと」をテーマにした力強いメッセージに、多くの皆様の胸が熱くなったことと思います。会の終盤には、外科学教室の黒田達夫教授(小児)、浅村尚生教授(呼吸器)、志水秀行教授(心臓血管)より主催者挨拶をいたしました。2023年3月で退任された黒田達夫教授、浅村尚生教授に向けて、感謝の想いを形にしたサプライズビデオが上映され、後任の藤野明浩(現)教授、朝倉啓介(現)教授からそれぞれ黒田教授と浅村教授への花束贈呈とともにご挨拶をしていただきました。引き続き、応援指導部による若き血演奏、および熱いエールを頂戴し、改めて義塾の強い団結力を感じることができました。最後に「命と向き合い外科医として生きる」ビデオメッセージとともに、私から中締め挨拶を行い、会は成功裏に終えることができました。さらに今回、2020年の日本外科学会定期学術集会で叶わなかった皆様との写真撮影ができましたことは望外の喜びです。

新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行前ではございましたが、クラスター発生等の大きな問題もなく、盛会に終えることができましたのは、刀林会の皆様、視聴くださった皆様のご尽力があったこそと改めて心より感謝申し上げます。100周年祝賀会を盛会裏に終えることができましたことを励みとし、今後も慶應義塾大学医学部外科学教室の発展のために尽力して参る所存でございます。今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

末筆ではございますが、ますますのご健勝とご多幸を衷心よりお祈り申し上げます。慶應義塾大学医学部外科学教室100周年祝賀会のご報告とお礼とさせていただきます。



慶應義塾大学医学部外科学教室 100 周年記念祝賀会 一般・消化器外科



慶應義塾大学医学部外科学教室 100 周年記念祝賀会 一般・消化器外科



慶應義塾大学医学部外科学教室 100 周年記念祝賀会 一般・消化器外科



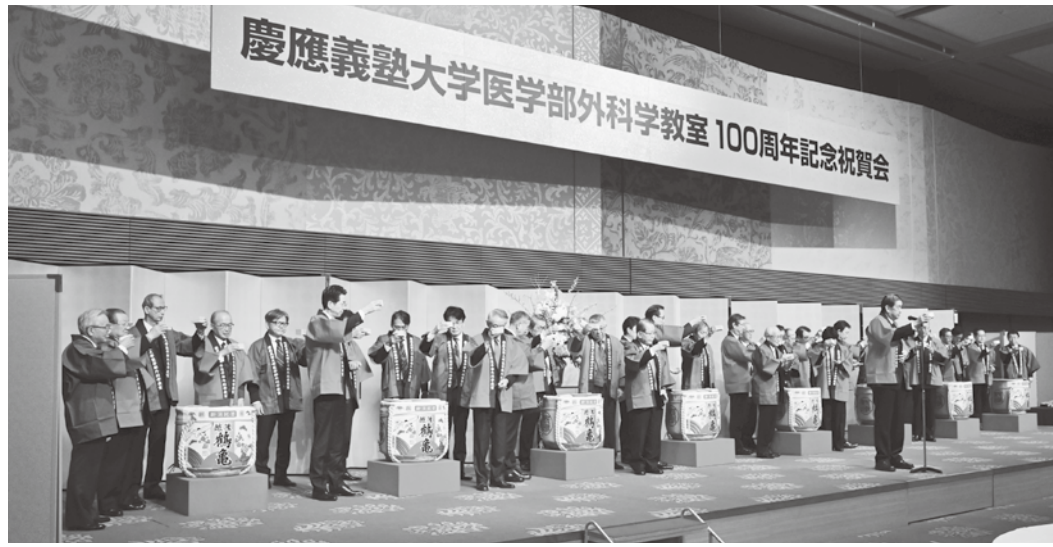
慶應義塾大学医学部外科学教室 100周年記念祝賀会 呼吸器外科



慶應義塾大学医学部外科学教室 100周年記念祝賀会 心臓血管外科



慶應義塾大学医学部外科学教室 100周年記念祝賀会 小児外科



**教室主任就任**

**外科学教室主任に就任して**



慶應義塾大学医学部  
外科(心臓血管)教授  
志水 秀行(65回)

2023年4月から、外科学教室の教室主任を浅村尚生教授より引き継がせて頂きました。

慶應義塾大学外科学教室は、一般・消化器、小児呼吸器、心臓血管の4診療科それぞれが各分野において道を極めると共に、外科学という共通の基盤の上で力を結集することによって高いプレゼンスを維持してきた誇るべき組織であり、教室主任を務める責任の重さに身が引き締まる思いであります。

大学と関連病院が一体となって若手を育成すること、診療科間の垣根が低く、風通しの良い連携によって臨床や学会活動などさまざまな面で大きな力を発揮してきたことは当教室の優れた伝統であり、是非とも継承しなければならぬと考えています。

私自身、大学と関連病院の両方において、多くの先輩方から、手術のスキルや術後管理の実践はもちろん、外科医としての心構え、チーム作りなど、幅広く多くのことを学び、成長させて頂きました。また、教室の総合力によって、難しい病態の患者さんのたくさん命を救えたこと、研究において全く新しい発想を得られたこと、学会等で幅広く活躍の場を頂いたことなど、単一診療科では決して成し得なかった経験を数多く重ねて参りました。

医療の飛躍は目覚ましく、現在の外科医療の姿は私が医者になったころとは隔世の感があります。われわれは日々の医療を堅実に行うとともに、最新の知識や技術を身に付け、より高度な外科医療を追求する不撓の努力をしなければなりません。さらに、新型感染症・外科医の減少・働き方改革への対応など、山積する課題に対し、叡智を結集して力強く前進する環境を整えることも必要です。そして何より、将来を担う優れた外科医を育成し続けなければなりません。

教室100周年という大きな節目を終えた今、これまで培われてきた教室の魅力大切に守り、さらに発展させるために、北川教授、藤野教授、朝倉教授としっかりと連携して教室を運営し、教室の皆様とともに輝かしい未来を目指したいと願っています。

皆様のお力添え、ご協力を何卒宜しくお願い申し上げます。



教授就任

慶應義塾大学医学部外科学 (小児) 教授就任



藤野 明浩(75回)

令和5年4月1日付けで、黒田達夫教授の後任として慶應義塾大学医学部外科学(小児)教室の3代目教授を拝命した藤野明浩(75回生)と申します。この場をお借りして、これまでにご指導とご厚情を賜りました刀林会の先生方に厚く御礼申し上げます。始めに、私を小児外科の道へ誘導いただいた故北島政樹先生にご報告と感謝を捧げたいと存じます。直接お伝えできなかったことは無念ですが、この報告がご恩返しとなることを願っております。そして、小児外科医として真つ新であった私に直接慶應小児外科の心得を深くご教授下さった横山穰太郎先生(元助教)、森川康英先生(初代教授)、星野健先生(元准教授)、小児病院の匠の技を授けて下さった羽金和彦(元NHQ栃木医療センター)、黒田達夫(前教授、現神奈川県立こども医療センター)先生、外科医の心構えを豊に教えて下さった原彰男(NHQ埼玉病院名

誉院長)、瀧本康史(国際医療福祉大学)、平林健(弘前大学)、隈元雄介(北里大学)先生をはじめとする数え切れない大勢の諸先輩方、そして私を支えてくださった先輩、後輩の皆さま、外科学教室に暖かく迎えてくださった北川雄光教授、志水秀行教授に厚く御礼申し上げます。慶應外科では、小児を対象とするチームが日本での先駆けとして昭和34年に発足し、諸先輩が心血を注ぎ、それまで治療困難であったヒルシユスプルング病、鎖肛、胆道閉鎖、そして小児の代謝栄養・肝移植等の臨床・基礎研究を発展させ、日本をリードしてきまされた。そして2004年、森川康英先生が外科学(小児)を立ち上げ、小児外科領域の代表的疾患の研究を発展させると共に、日本の小児外科に内視鏡手術を導入し、先端機器を用いた医療の普及・発展に尽力されました。黒田達夫二代目教授は「小児固形腫瘍」「腸管不全」「小児移植」「リンパ

管疾患」の4課題を柱として研究の発展に成功されました。このように慶應小児外科は小児の様々な「難病」に果敢に挑戦し、その診療の質を上げ予後を改善させてきました。私も、この素晴らしい伝統を堅持し、長年取り組んできた先天性リンパ管疾患をはじめとして小児外科特有の発生異常、先天性の難治性疾患の子どもとご家族の幸せを目指して、臨床・研究に取り組んでいく所存です。昨今、急速な少子化は大きな社会問題ですが、小児の医療においても影響は切実です。ニーズにこたえて構築された小児医療施設の分布・構成は現在のままで存続することは、診療・教育いづれにおいても非効率的かつ質の担保も容易ではなくなるため、国の方向性として集約化への流れは不可避です。一方、当然ながら、質の高い医療を提供すると共に医学を発展させることが我々の使命です。時代の急速な変化の中で体制を維持し小児医療の発展に拡大

していくためには、研究・臨床共に良質でしかも必要とされる存在であることが必須です。改めて大教室制の慶應外科の利点を生かして外科各科の洗練された技術と研究の最先端を共有させて頂きつつ、多方面に活躍の場を求め、社会のニーズに敏感に対応していきたくと考えています。私は、これまでは完全に引つ張って頂く形で外科学教室にお世話になっておりましたが、これからはよりよい未来へ向かって外科学4診療科で協力しあい教室全体を引っ張って行くべく尽力したいと存じます。ご承知のとおり小児外科は外科学教室の中ではもともと小さい科ですが、まとまりの良さを前面に出して、外科学教室の一専門科として刀林会においてもしっかりと存在感を示したいと考えます。至らぬ点は多々あることと存じますが、今後ともご指導、ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

慶應義塾大学医学部外科学 (呼吸器) 教授を拝命して



朝倉 啓介(81回)

この度、外科学(呼吸器)教授を拝命しました朝倉啓介と申します。私は2002年に大学の外科フレッシュマンとなり、高橋伸先生率いる日本鋼管病院出張、山藤和夫先生率いるさいたま市立病院出張を経験し、2005年に外科学(呼吸器)教室に入室しました。大学での修練および学位取得においては小林紘一教授、野守裕明教授、川村雅文先生、堀之内宏久先生、渡辺真純先生、泉陽太郎先生を始めとする当時のスタッフの先生方に手厚いご指導をいただきました。現代の呼吸器外科の主戦場は肺癌の低侵襲手術ですが、結核外科のCZが残っていた当時の慶應で感染症の外科や大開胸手術を学べたことは幸運でした。そして、胸腔鏡手術を学ぶための姫路医療センターへの国内留学を経て、2015年に浅村尚生教授のご高配で国立がん研究センター中央病院に異動したことが、キャリアアップの転機になりました。3年半の在籍期間に4名の

スタッフの一人として手術漬けの日々を送りながら、本邦最多の肺癌症例数を生かした臨床研究やトランスレーショナルリサーチに携わることができました。2018年に専任講師として再び浅村教授の下で臨床・研究・教育に携わる機会を頂き、外科学教室では北川雄光教授、黒田達夫教授、志水秀行教授に親身なご指導をいただきました。2021年には北川常任理事、松本守雄病院長のご高配で医療連携・医師働き方改革担当の病院長補佐を拝命し、病院執行部の末席で病院経営にも参画させていただいております。ここまでのキャリアを振り返って思うことは、自分が先輩方の貴重な時間を使ってどれだけ面倒を見ていただいたか、外科学教室からどれだけ多くの成長のチャンスを与えていただいたか、ということだと思います。この恩を外科学教室にお返しし、次世代にも同じチャンスを与えることが自分の使命と考えています。

最後に、伝統ある教室のさらなる発展のために、「患者と医師に選ばれる呼吸器外科」を目指したいと思えます。患者に選ばれるには患者目線かつ先進的な医療を行う必要があります。2023年5月から開始した凍結療法や6月から開始予定のロボット手術はそのための第一歩です。また、医師に選ばれるには、質の高い診療・研究・教育を行いながら、「ここに長く身を

置きたい」と思える組織文化を作る必要があります。その根幹は教室員の「個の尊重(≡独立自尊)」であろうと考えています。いづれも浅学非才の私にとつて容易なことではありませんが、諸先輩のご指導を仰ぎながら、教室員の力を束ねて着実に進んでいきたいと思えます。刀林会の先生方におかれましては引き続きご指導ご鞭撻の程何卒宜しくお願い申し上げます。



# 帝京大学医学部外科学講座

## 教授就任



落合 大樹(77回)

この度、令和5年4月1日付けで帝京大学医学部外科学講座・下部消化管部門教授を拝命いたしました。これまで刀林会の諸先生方より多くのご指導、ご支援を賜りましたこと厚く御礼申し上げます。特に、外科学教室教授・北川雄光先生、北里研究所病院院長・渡邊昌彦先生には帝京大学医学部外科学講座教授就任に当たり多大なるお力添えを頂きました。この場を借りて深く感謝申し上げます。また迎えていただいた帝京大学医学部の皆様にも深く感謝申し上げます。

児外科のセクションがあり、各々には分野担当教授が存在し管轄しています。若手医師は、それぞれの分野にとられず横断的に臨床経験を積める、私自身は慣れ親しんできました慶大外科と類似しているプログラムです。

私は、慶應病院での外科フレッシュマン修行の後、東京歯科大学市川総合病院、済生会宇都宮病院で外科の基礎をご指導頂きました。腸班に所属し専門を決めてからは、長谷川博俊先生・石井良幸先生にご指導頂きました。国立病院機構・東京医療センター外科での勤務を経て米国・マサチューセッツ総合病院(MGH)・放射線腫瘍学ではD. Duda博士のもと消化器固形腫瘍の浸潤転移に関わる基礎研究、MGHでの臨床研究のイロハを学ぶ機会を頂きました。帰国後は、国立がん研究センター中央病院・大腸外科で大腸癌の手術修練を積みました。これまで私は臨床・教育・研

究の最先端を勉強してきました。腸班の先輩・小平進先生が立ち上げた帝京大学医学部外科学講座下部消化管部門の伝統を踏襲し、低侵襲手術から高難度手術まで大腸疾患の領域を広くカバーして安全かつ高レベルの外科医療を行いたいと考えています。手術式の定型化に基づいた後進外科医の指導・教育、優れた若手外科医の発掘・育成にも尽力していきます。日常臨床における素朴な疑問から仮説を立て、解決・立証を目標に基礎医学研究者との共同研究も進めたいと考えています。患者に寄り添い、親しみやすい帝京大学外科としての地歩を固めてまいりたいと思います。

刀林会会員の皆様のご指導・鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

帝京大学は、今年で開学57年を迎えました。医療系3学部(医学部・薬学部・医療技術部)が開学50周年のタイミングで板橋キャンパスに集められ、大学院を含めると5,000名の医療系学生が1つのキャンパスで勉学をしています。帝京大学外科学講座は、大講座制を確立しています。呼吸器・乳腺内分泌・消化器(上部・下部・肝胆膵)・小

## 教授退任

# 慶應義塾大学医学部外科(小児)

## 教授退任にあたって



神奈川県立  
こども医療センター総長  
黒田 達夫(61回)

令和5年3月をもちまして12年間勤めた慶應義塾大学医学部外科(小児)教授を定年、退任致しました。これまで色々にご指導、ご支援、そして温かい励ましを頂きました刀林会の諸先輩ならびに教室の方々に心から感謝の意を表したいと思います。小児外科学教室は講座としては若い教室ですが、国立、都立の小児病院やいくつもの大学、地域基幹病院へ多くの人材を輩出し、そうした諸先輩の活躍で慶應小児外科グループとして世界的な存在感を保つてきました。大学に戻るにあたり、慶應小児外科グループ全体の調和と絆の維持を最も重要な課題と考

えました。さらに小児外科学には多くのフロンティア分野が残されており、それに挑戦する魅力的な領域として、新しい小児外科のイメージを作り上げたいと思ひました。小さな池の間でひたすらながき続けた12年間であつたようにも思いますが、素晴らしい仲間

に囲まれてこの上なく楽しい12年間でもありました。日本小児外科学会では理事長として変革期の専門医制度に取り組み、社団法人化へのレールを敷いて学会基盤の強化に努め、また震災時の学会対応のロールモデルを作成しました。札幌を開催地にして、太平洋小児外科学会(Pacific Association of Pediatric Surgeons)を主催したことは忘れられない思い出です。また、以前の留学先、マサチューセッツ総合病院小児外科研究室の恩師であるDonahoe教授を訪ね、教室から再びボストンへ留学するようになり、若い人たちがそこで大きな仕事をして新しい技術、知識と共に帰国するようになったことも誇らしい思い出です。そうした若い力に支えられて、教室では周産期外科、小児がん、肝・小腸移植、脈管形成異常、小児呼吸器外科と臨床の幅を拡げ、再生医療の橋渡し研究から小児がん国際共同臨床試験まで研究を展開し

ました。フロンティア分野を進む夢と一緒に追いかけてくれた多くの仲間達に重ねてお礼を言います。その一方で、助けることの出来なかつた数百グラムに満たない小さな嬰兒の姿、子どもの頃から病気で成人まで頑張りながら若くして亡くなった患者さんの最後の笑顔など、胸に焼きついて消えない光景も多々あります。大学を去るにあたり、こうした辛い思い出も合わせて後進に伝え、いつかはそれを乗り越えてくれるように期待を込めて、次の世代へのバトンを渡したいと考えています。藤沢周平の一節に曰く、日残りに昏るるに未だ遠し。4月より神奈川県立こども医療センター総長として新たな仕事に挑戦しておりますが、立場を変えて、これからはできるだけ慶應大学ならびに慶應小児外科グループの後進の力になることができ

ばと思っております。



生薬には、個性がある。

漢方製剤にとって「良質」とは何か。その答えのひとつが「均質」である、とツムラは考えます。自然由来がゆえに、ひとつひとつに個性がある生薬。漢方製剤にとって、その成分のばらつきを抑え、一定に保つことが「良質」である。そう考える私たちは、栽培から製造にいたるすべてのプロセスで、自然由来の成分のばらつきを抑える技術を追求。これからのあるべき「ツムラ品質」を進化させ続けます。現代を生きる人々の健やかな毎日のために。自然と健康を科学する、漢方のツムラです。

良質。均質。ツムラ品質。

株式会社ツムラ <https://www.tsumura.co.jp/> 資料請求・お問合せは、お客様相談窓口まで。  
医療関係者の皆様 tel.0120-329-970 患者様・一般のお客様 tel.0120-329-930 受付時間 9:00~17:30(土・日・祝日は除く) 2021年4月制作



血漿分画製剤 薬価基準収載

## ボルヒール®組織接着用

生体組織接着剤 BOLHEAL® 賦血

特定生物由来製品 処方箋医薬品 注意-医師等の処方箋により使用すること

※効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については、添付文書をご参照ください。

製造販売元  
KMバイオロジクス株式会社  
熊本市北区大塚一丁目6番1号

販売元  
一般社団法人  
日本血液製剤機構  
東京都港区芝浦3-1-1

BOL-202108

[文献請求先及び問い合わせ先] 一般社団法人 日本血液製剤機構 ぐすり相談室  
〒108-0023 東京都港区芝浦3-1-1 医療関係者向け製品情報サイト <https://www.jbpo.or.jp/med/d/>

# 慶應義塾大学医学部外科学 (呼吸器) 教授退任及び外科学教室主任退任に当たって



東京歯科大学  
法人参与・特任教授  
浅村 尚生 (62回)

早いもので、医学部を卒業してあつという間に40年が経過し、3月をもちまして定年を迎えました。私は、このうち28年間を築地の国立がんセンターで、残りの12年を慶應とその関連病院で過ごした訳ですが、慶應の教授としては、最後の9年間の勤務ということになります。特にこの間の私の使命は、研究倫理指針逸脱によって一時中断のやむなきに至っていた呼吸器外科研究室の機能を、復活正常化し、若い研修医諸君の集う活気ある研究室に再生させることでありました。

そのためには、信頼される安定した外科手術を教室員に行き渡らせ、これによって手術時間の短縮と安全性向上を同時に達成することが当面の課題となりました。そして、このようにして得られた麻酔科、手術室の信頼を基盤に、呼吸器外科手術の高い収益性を生かして、手術件数の増加を

図ることに邁進しました。が、ほぼ3年でこの方向性を軌道に乗せることができず、やはり、外科系の研究室では、手術件数が多いことが就中重要な成長因子であると思います。また、私がさらに取り組んだのは、教室運営の多角化であり、その一環として非腫瘍性疾患の手術件数の増加を、菱田准教授とともに模索しました。具体的には、当時ごく限られた施設でしか行われていなかった「漏斗胸」に対する「Nuss手術」に取り組み(政井講師)、現在では本邦最大の手術件数を達成するに至りました。気胸ホットラインによる気胸症例の積極的な受け入れもその一環であり(加勢田講師)、研修医にとつては執刀症例の確保という重要な恩恵となりました。

このような地道な努力、医局員諸君の頑張りによって、呼吸器外科の手術症例数は、私の着任前と比較すると倍増させることができ、何より嬉しかったことは、こういった呼吸器外科は、こういった呼吸器外科研究室の取り組みを、医学部、JICCと世界肺癌学会、IASLCの場で、もう少し継続して参りたいと思っております。また、私が石川スクールから引き継いで参りましたTNSM病期分類の仕事や、JICCと世界肺癌学会を、JASLCの場で、もう少し継続して参りたいと思っております。

# 藤田医科大学医学部乳腺外科 教授退任

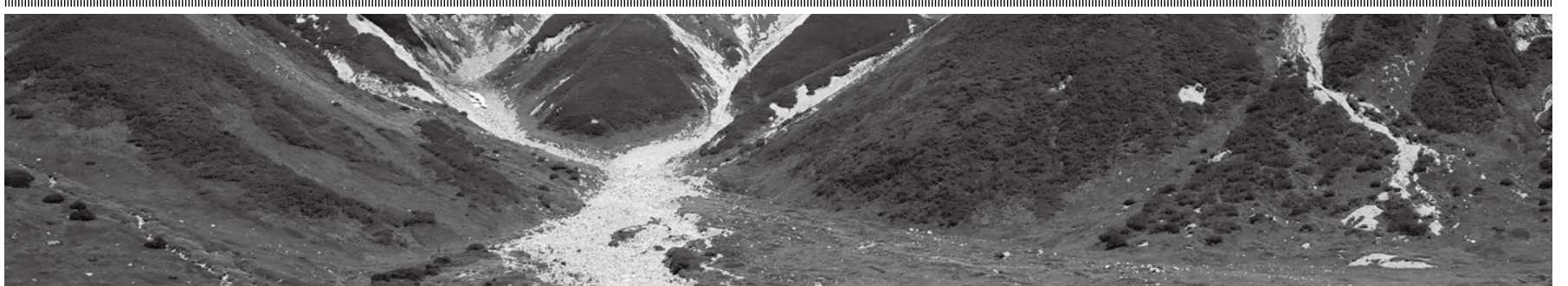


内海 俊明 (62回相)

2022年3月をもちまして藤田医科大学を定年退職いたしました。1991年に藤田保健衛生大学(現、藤田医科大学)に赴任して以来、医師人生の大半を当大学で過ごしました。お陰様で、充実した時間を過ごすことができ、大過なく職責を全うすることができました。これもひとえに、刀林会の先生方をはじめとして内外の多くの皆様の温かいご支援とご厚情の賜物と深く感謝申し上げます。

私はがんの診療に興味があり、弘前大学卒業後、1983年に慶應義塾大学医学部 一般・消化器外科学教室に入局しました。1991年4月にポストチーフの出張先であった足利赤十字病院を離れ、丸田守人教授(44回)が主宰される藤田保健衛生大学 消化器外科第4科に赴任いたしました。足利赤十字病院時代に藤

大受お世話になりました。藤田医科大学(56回)には気持ちよく送り出していたことを今でも鮮明に覚えております。赴任時、本学にはいわゆるナンバー外科として消化器外科第1科から第4科までが存在し、各教室が横断的に様々な臓器の疾患を扱っております。その後、外科系講座の臓器別編成に伴い、2005年に乳腺外科が開設され、丸田守人先生をはじめ多くの先生のご支援のもと同教授に就任しました。就任後、多くのスタッフと協力しながら、専門的で先進的診療を推進し、患者にとり安心感のある医療体制の構築に努めました。近隣の医療機関からの紹介患者数も増加し、年間手術件数は早々に乳腺外科開設当初の4倍ほどになりました。これはスタッフと共に推進した医療が周囲に浸透し、認知された結果と考えております。乳がん診療の推進に加え、乳がんの治療で活躍する次世代を育成することは重要なテーマでした。教室員の多くが乳腺専門医を取得し、なかには出身地に帰りそれぞれの地域の基幹病院で活躍している医師もおり、嬉しく思っております。研究活動の機会にも恵まれ、阿部令彦先生(30回)、榎本耕治先生(40回)、藤原潔先生(55回)、菊池潔先生(56回)から教え授けたりサーチマインドを持つて、多領域の方々との共同研究も行うことも出来ました。多くの出会いのひとつひとつが自分の人生を築き上げてくれたものと、感謝の念に堪えません。現在はご縁があり三河乳がんクリニックに勤務しており、乳がんの診療と研究を続けております。



# 多摩丘陵病院院長就任



小澤 壯治(60回)

2023年5月1日付けで院長を拝命しました小澤壯治です。1981年に大澤を卒業後、慶應義塾大学病院に計19年間、途中3年間の米国留学を経て、2005年から藤田保健衛生大学坂文種報徳会病院に3年半、2009年から東海大学医学部付属病院に12年間勤務いたしました。2021年から多摩丘陵病院で副院長・外科部長として外科臨床に携わってまいりました。当院に赴任してから、名誉理事長の掛川暉夫先生(33回)と前院長で理事長の島津元秀先生(53回)のご指導の下、一般病院の運営や地域医療などを学んでまいりました。

婦人科、皮膚科、形成外科・美容外科、歯科の13です。患者用の無料駐車場は、新規に108台分を現在の380台分に加えて合計488台分を確保して、地域柄利用の多い自家用車での来院患者に対するサービス向上を図っています。

診療を担当する医師につきましては、恒常的な医師の雇用の観点から、大学との関わりを大切にしています。北川雄光常任理事・外科学教授のご配慮により、慶應義塾大学からは当院が最も重要視している外科ならびに神経内科、他方で東京医科大学からも整形外科・消化器外科・消化器内科・皮膚科、杏林大学からは麻酔科・脳神経外科・リハビリテーション科、東海大学からは消化器内科、北里大学からは乳腺外科・循環器内科、帝京大学からは乳腺外科、さらに国士館大学からは救急科といった多様な連携により、大学からの派遣医師と当院採用医師

が協力して幅広く質の高い診療を行っています。

当院の理念は、「生きる力を支え合い、ぬくもりのある医療と看護を提供します。」であり、開院以来大切にしてきました。基本方針は次の4つです。①急性期医療、救急医療、在宅復帰に向けた医療、予防医療を提供する。②患者に思いやりをもつて、親切な医療・看護サービスを提供する。③地域の医療機関と綿密に連携して、地域医療に貢献する。④職員と家族の幸福を願い、働きがいのある病院を目指す。

も本格的に取り組み。④呼吸器外科外来も新設して、食道外科とともに胸部疾患診療の幅を広げる。

全職員は心待ちにしていた新病院での勤務に心躍らせています。その高揚感を大切にしつつ、全職員が一丸となって新病院の船出が順調に進むよう、日々精進したいと思えます。刀林会会員の先生方をはじめ皆様方のご指導ご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

この度、令和5年4月30日をもって医療法人社団幸隆会 多摩丘陵病院の院長を退任いたしました。掛川暉夫前院長(現名誉理事長)の後を継ぎ、第5代院長に就任したのは平成27年4月1日で、丸8年1月務めたこととなります。令和4年6月には掛川先生の勇退に伴い理事長を兼務することになりましたが、今後は理事長に専任いたします。

当院の奉職前はチーフ出張後、藤田医科大学、慶應義塾大学、東京医科大学と一貫して大学病院に勤務してまいりましたので、規模も組織も文化も異なる民間病院での勤務は未知の領域でした。幸い、掛川先生が理事長として指導して下さい、北川雄光教授の元から派遣された優秀な人材が精勤してくれましたお陰で、大過なく院長職を務めあげることができました。就任当時の外科スタッフは櫻川忠之、丸山正太郎、内雄介と研修医(D3) 青山純也で、その

後D3として阿部敏大、鳥崎友紀子、宇田川大輔、城崎浩司、枝浪元紀、砂村賢、青木拓万、新川将弘の諸君が相次いで出張してきてました。令和2年度には丸山の退職に伴いポストチーフの遠藤泰が赴任し、令和3年度には櫻川が退職し、東海大学が副院長・外科部長として就任しました。令和4年度には遠藤が退職・留学し、安藤知史と林航輝が就職、今年度は安藤が退職し、ポストチーフの原良輔が就職して計6名のスタッフが現在に至っております。

院長時代に行ったことは、各種委員会の整備、地域連携室の設置、病院広報誌(たまきゅう便り)および病院年報の発行、外来化学療法室の設置、サテライトクリニックの開設、通所リハビリセンターの設置、電子カルテの導入、救急科および消化器センターの新設準備、そして最後の大仕事として病院新築移転プロジェクトの着手などでした。

当院は昭和57年5月に開院し、地域の患者様や医療機関の方々に支えられて、当初の288床から2度の増改築を経て316床のケアミックス病院に成長しました。しかし、40周年を過ぎ初期の設備の老朽化が著しく、建て替えが急務となり、平成30年に近隣地への新築移転計画が立案されました。比較的新しいリハビリ棟117床を現病院に存続させ、急性期と地域包

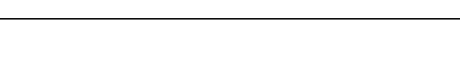
括から成る一般病床199床を新築移転することにし、令和3年2月に着工、本年1月に竣工致しました。そして4月22日に完成祝賀会・内覧会を催し、北川常任理事にもご参列・ご祝辞を頂きました。

5月1日に開院した早々にこの挨拶文を書いていますが、今後は小澤新院長のもと外科が中心となって新病院を盛り立てて更に発展させていく事を期待しています。刀林会の諸先生の引き続きのご指導・ご支援をお願い申し上げます。



島津 元秀(53回)

# 多摩丘陵病院院長退任





# 浜松赤十字病院院長を退任して



奥田 康一 (59回)

私儀、この度令和5年3月31日付で浜松赤十字病院の院長を退任いたしました。

卒後7年目のチーフ出張として昭和61年5月に着任後、継続して37年間お世話になりました。その間刀林会の尊敬する諸先輩にお導きいただき、また、優秀な後輩にも恵まれ浅学非才な私でも何とか無事にすごしてまいりました。あらためて皆様にご心より御礼申し上げます。

昭和13年3月浜松市高林に開設された当院は、初代院長山田鐵三郎先生(10回内科)から2代目益頭尚道先生(25回内科)、3代目住山正男先生(32回外科)、4代目安藤幸史先生(45回外科)に引き継がれ、平成23年4月から私が5代目院長として当院を運営してまいりました。住山先生には外科医としての心構えを、安藤先生には病院経営のいろはからご指導いただきました。平成15年に就任した副院長時代から、外科の臨床はほとんど西脇眞君(66回)

に任せてきており、長きにわたり私とともに歩んできてくれた仲間として、同君には最も感謝しております。また、院長就任の直前3月11日に東日本大震災が被災し、当日から救護班を出勤させるにあたり、新婚間もない伊藤亮君(83回)を班長に指名したことを快諾してくれたことも強く印象に残っています。このことを端緒に、決断と実行を即座に求められる12年間でした。

東京からは距離的にも遠く、慶應の学生も東京近郊出身が大多数を占めるようになり、慶應から当院への常勤医の派遣は外科以外にはほぼなくなりました。今では地元の浜松医大からの派遣が医局員の2/3以上を占める状況です。そんな中にあつても外科学教室からは絶え間なくスタッフおよび専攻医を派遣していただき、誠に感謝に堪えません。

中規模病院の悲哀を感じてきたものとして院長職を引き受けてくれる人材はなかなかおりませんが、唯一

# 国立病院機構 埼玉病院 院長退任



原 彰男 (60回)

このたび、2023年3月31日付けをもちまして、独立行政法人 国立病院機構 埼玉病院の院長を退任いたしました。

埼玉病院は2010年に建て替えを行い、本館(350床)を新たに建設しました。建て替えが終了したばかりでしたが、2013年に埼玉県第6次地域保健医療計画が発表され、埼玉病院が属する南西部医療圏では2025年問題を見据え、約400床の増床を行う事が決定、埼玉病院はその半分である200床の増床を行う事になりました。

2010年より副院長、2017年より院長に就任しましたので、13年間責任者として本館の建て替え・200床の増床(新館)を行ってきました。東日本大震災や東京オリンピックの影響で、建築費の高騰や人材・資材不足が重なり、なかなか計画通りに進まず苦慮しましたが、ようやく2019年に新館の建設、本館の改修・外溝の整備など、予定されていたすべての工事を終了させることが出来ま

した。工事中もとても困難であったことは、本館の改修であり、通常の診療機能を維持しながら、外来や手術室の増設(6室→11室)などの改修をすすめることには至難の業でした。連日会議・現場での打ち合わせの連続であり、病院職員の積極的な協力は成し遂げることができませんでした。さらに550床の病院として相応しい診療機能を充実させるため、口腔外科・腎臓内科・血液膠原病内科・病理診断科等新たな診療科の新設および緩和医療センター、NICU・CCU・産科病棟の整備など地域周産期母子医療センターの開設などを行いました。医師派遣に関し、慶応義塾大学は勿論の事、複数の大学医局との交渉を粘り強く行いましたが、協力がなかなか得られず悔しい思いも多々ありました。2021年病院創立80周年を迎える節目の年に、埼玉県で10施設目となる救命救急センターの開設を行い、埼玉病院は急性期医療および種々の高度専門医療を中心とした550床

の病院として、新たなスタートを切る事が出来ました。2013年の計画から8年間かかりましたが、ようやく地域の基幹病院として、ゆるぎない基盤ができたと感慨深く思っています。2021年に始まった新型コロナウィルス感染症に関しても、病棟に余裕ができ、救命救急センターなどの診療機能が充実したことにより、重点医療機関としての責務を果たすことが出来たと思っております。もともと入院患者数が多かった時には50名以上の患者が入院、人工呼吸器も常時10台以上が稼働している状況でした。

後任院長は消化器内科 細田泰雄(66回)先生に、外科は副院長早津成夫(73回)先生にお願いいたしました。在任中、刀林会の諸先生方のご支援に心より感謝申し上げますと共に、今後とも引き続き埼玉病院の益々の発展にご指導、ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。



抗悪性腫瘍剤  
 劇薬、処方箋医薬品(注意—医師等の処方箋により使用すること)

**ロンサーフ® 配合錠 T15 T20**  
**Lonsurf combination tablets**  
 トリフルリジン・チピラシル塩酸塩配合錠 薬価基準収載

文献請求先及び問い合わせ先  
**大鵬薬品工業株式会社**  
 〒101-8444 東京都千代田区神田錦町1-27  
 TEL.0120-20-4527 <https://www.taino.co.jp/>

効能又は効果、用法及び用量、警告・禁忌を含む注意事項等情報は電子添文をご確認ください。

2023年5月作成

学会紹介

第59回日本小児循環器学会総会・学術集会



第59回日本小児循環器学会総会・学術集会会長  
埼玉医科大学国際医療センター  
心臓病センター長・小児心臓外科教授  
鈴木 孝明 (62回)

この度、2023年7月に第59回日本小児循環器学会学術集会(パシフィコ横浜ノース、神奈川県横浜市)を開催させていただきました。

本学術集会は1965年に第1回小児循環器研究会として発足し、1981年に日本小児循環器学会学術集会に発展した伝統と実績のある学術集会であり、この様な機会を頂きましたことに心より感謝申し上げます。日本小児循環器学会は小児循環器医療に携わる小児科医、内科医、外科医、その他多職種の医療従事者(看護師・臨床工学技士・薬剤師・理学療法士など)が一堂に会するというユニークな学会です。本学術集会の開催は、三四会員としましては第8回(1972年)を小佐野満先生(30回)、第28回(1992年)を今井康晴先生(39回)が会長として主催されました。刀林会員としましては

31年ぶりの開催であり、私どもにとつて大変な栄誉であり大きな成果を上げたいと思っております。小児期心疾患に対する治療の選択肢はこの10年で飛躍的に増えました。カテーテル治療技術の発達、臓器移植法の改正、小児用補助人工心臓の保健適用、循環作動薬や肺高血圧治療薬の開発など、さまざまな領域における人々の努力が治療に活かされています。現場で活躍する医療者だけでなく、世界中のあらゆる領域で人々のパッションが注がれています。われわれ医療者は先天性心疾患をはじめとした循環器病を持つ患者さんたちを「永続的に、調和をもって支える」ことが重要であることを再認識するべく「Perpetual Harmony behind the Smile」をメインテーマとして掲げました。心疾患を抱えて生まれてから成長し成人期に至るまで、患者さんとその保護

者の方々に医療は継続的に提供されるべきであり、また多岐にわたる医療者の役割を結集し調和をもって患者さんひとりひとりの人生を支えて行くべきであると考えます。小児期心疾患治療における診療領域の細分化、専門化が進んでいます。このことが個々の領域の進歩に寄与していることは間違いありませんが、領域を跨いだ multidisciplinary なアプローチが益々重要となっています。職種の垣根を無くしたチーム医療のお手本が小児循環器医療であり、こうした様々な領域の叡智が結集するのが本学術集会であり、診療領域を越えてそれらを学び、心疾患患者たちの診療に活かす責務を私どもは負っています。様々な領域よりテーマを引き出し、活発な討論の場を用意すべく、多くの主題セッションを企画いたしました。本学術集会の特徴は、

第64回日本脈管学会学術総会



慶應義塾大学医学部  
外科学(心臓血管) 教授  
志水 秀行 (65回)

このたび、2023年10月26日(木)〜10月28日(土)の会期にて、パシフィコ横浜ノース(神奈川県横浜市西区みなとみらい1-1-1)において、第64回日本脈管学会学術総会を開催させていただきます。

来であり、慶應関連としては2012年に栗林幸夫放射線診断科教授(当時)が第53回学術総会を主催されて以来になります。脈管学は高度に専門化、細分化され、それぞれの分野が素晴らしい発展を遂げています。健康にも多くの疾病にも深く関わっている学問領域として、教室や診療科、職種、施設、分野、医学界や産業界といったさまざまな垣根を越えた幅広い分野の専門家が「つながり」、それぞれの持つ知識、アイデア、技術を「つなぐ」ことで新たな展開を生み出し、その成果を確実に次世代に「つなぎ」発展させることが、輝かしい未来に「つながる」と考えられます。多領域の専門家が能力を結集し、脈管学の未来を担う若手と共に歩む姿を思い浮かべ、今回の学術総会のテーマを「つなごう、脈管学の未来のために」と致しました。学術集会のポスターには、塾員である藤城清治氏の『月光の響』を使わせて頂きました。日々の努力によって美しい響きを奏でているひとりひとりにスポットライトをあてるイメージと重ね、優しく美しい藤城氏の作品の中から選りたく、何卒宜しくお願ひ申し上げます。

診療科横断的かつ多職種からなる参加者による発表と熱い議論です。互いに尊重し合いながら各々の役割を果たしていくことが患者さんの利益につながります。そんな雰囲気を含んで以上に感じられる学術集会にしたいと考えております。どうぞご支援のほどよろしくお願い申し上げます。末筆ながら皆様のますますのご健勝とご活躍を祈念申し上げます。

日本脈管学会は、動脈、静脈、リンパ管、微小循環の研究および臨床に携わる外科、内科、放射線科、基礎(解剖学、生理学、再生医療など)、医療工学、薬学、看護学など、さまざまな分野で活躍するプロフェッショナルによって構成されている学際的な組織です。1960年に慶應義塾大学生理学教室の故林 謙教授が本学東校舎講堂で設立総会を開催されて以来、学術総会において関連する最新情報の共有と討論が行われ、長きにわたり本領域を牽引してきた伝統ある統合学会です。心臓大血管分野からの会長は2014年以



# 第35回日本内視鏡外科学会総会を終えて



藤田医科大学  
先端ロボット・内視鏡手術学講座教授  
宇山 一郎 (64回相)

第35回日本内視鏡外科学会総会を「Create disrupt-live innovation! ハードルを踏み倒して進め!」のテーマを掲げ2022年12月8日〜10日の3日間、ポートメッセ名古屋(名古屋国際展示場)において、アジアロボット・内視鏡外科学会 (ACRIS 2022)、杉岡 篤会長(57回)と同時間催いたしました。多くの若手外科医に現地参加していただき、Face to Face で語り合う重要性を体感していただきました。上級演題以外は現地発表のみとさせていただきます。学会会員皆様からの温かいご支援のおかげで、総参加人数7000名以上(企業、招待者含む)、参加登録人数6753名、現地参加人数4500名と大盛況のうちに開催することができました。ひとえに刀林会の先生方による数々の温かいご支援の賜物にて、心より御礼申し上げます。

改装オーブンしたばかりの会場で、会場ではなく、展示場であったため、音響システムなど多くの不安要素を残したままの開催となりました。展示場の利点を最大に活かし、企業展示会場を広く取り、その周辺に発表会場を設置するという今までにないスタイルを採用しました。その結果、多くの参加者が企業展示会場に立ち寄る結果となりました。今回の企業展示では、1) da Vinci SP (Intuitive Surgical)、2) da Vinci Xi (Intuitive Surgical)、3) hinotori (Medcaroid)、4) Hugo (Medtronic)、5) Senhance (Asensus)、6) Saroa (Reverfield)、7) Ansur (Asahi Surgical Robotics) 以上計7機種の内視鏡手術支援ロボットが展示されました。参加者の手術支援ロボットに対する関心は高く、展示会場も非常に盛り上がり、多くの人が熱気に溢れておりました。

本総会では、例年のように著名人による特別講演ではなく、北川雄光理事に「医師働き方改革が医療・医学の将来に及ぼす影響と望まれる対策」、岩中 督先生には「診療報酬改定における外科系技術審査の現状と課題」・外保連会長の視点から「というタイトルで、外科医に切迫した問題」・課題に関して特別講演をいただきました。さらに、坂井義治理事長には「JSES この1年、次の1年」というテーマで理事長講演をいただきました。そして、渡邊昌彦名誉理事長のご司会のもと会長講演を、学会テーマと同様のタイトルとし、小生が行ってきた低侵襲手術の25年を振り返り、今後の内視鏡外科の未来や展望について講演いたしました。王 貞治氏からのビデオメッセージも講演中に供覧させていただきました。ありがとうございました。1000名を超える方々にご参集いただき、心より感謝申し上げます。その他に、シンポジウム16企画、パネルディス

カッション26企画、ワークショップ45企画、医工連携セッション3企画、教育講演等39企画、ハンズオンセミナー3企画を盛沢山でしたが、すべて高い評価を得ておりました。また、ロボット支援手術プロクターの質の保持のため、第1回日本内視鏡外科学会ロボット支援プロクター教育セミナーも開催させていただきました。最後に、この学会にご参加いただきました刀林会の先生方に有意義な時間になったことを願い、学会総会の報告とさせていただきます。

# アジアロボット・内視鏡外科学会 (ACRIS 2022) を終えて



アジアロボット・内視鏡外科学会 (ACRIS 2022) 会長  
藤田医科大学 国際医療センター 特命教授  
杉岡 篤 (61回)

このたびアジアロボット・内視鏡外科学会 (ACRIS 2022) を2022年12月8日から10日の期間に「ポートメッセなごや」において、開催することができました。これもひとえに刀林会の皆様のご支援の賜物と心より感謝申し上げます。

本学会は、先端的外科領域である低侵襲手術(内視鏡手術)およびロボット支援手術)全般に関する技術・知識や倫理について、アジアの医療従事者への普及と医療レベル向上を目的として、二年ごとにアジア各地で企画・開催され、今回で第7回となります。

現在、アジアにおける低侵襲手術の発展は目覚ましいものがあり、世界を牽引しているといっても過言ではありません。急速に歩を進める低侵襲手術の全領域を網羅する本学会を日本で開催できたことは大変意義深いものと思っております。

2019年以降のCOVID-19のパンデミックにより、本学会も当初の2020年9月の開催予定から約1年延期せざるをえませんでした。関係各位の多大なる支援を得てハイブリッド開催ながら、何とか開催にこぎつけることができました。国内外から約800名と例年以上に多くの現地参加者を迎えることができました。あらためて感謝いたしました。特に国内外の第一線で活躍する著名な内視鏡外科医が一堂に会し、300演題を超える特別講演、上級演題、口演及びデジタル・ポスターの発表がなされ、それに対して若手をはじめとして積極的なディスカッションが行われていました。あらためて対面での国際学会の意義を再認識した次第です。

学会の内容としては、各領域における近年の低侵襲手術の工夫と進歩が数多く報告されました。特に印象的であったのは、多くの領域で拡大視効果と精緻な手術手技により従来の(開胸・開腹等の)手術を凌駕する

# アジアロボット・内視鏡外科学会 (ACRLS 2022) 会計報告書

●アジアロボット・内視鏡外科学会 (ACRLS 2022) 会計報告書

2023年5月19日

■収入

項目	単価	数量	単位	按分	金額
<b>I 参加費収入</b>		<b>1,054</b>	<b>名</b>		<b>¥3,938,580</b>
1 【早期】ACRLS単独参加費 (日本人) *Doctor, Medical Staff, Others	18,000	11	名	100%	¥198,000
2 【早期】ACRLS単独参加費 (海外) *Doctor, Medical Staff, Others	18,000	10	名	100%	¥180,000
3 【早期】JSES+ACRLS合同参加費 (日本人)	3,000	686	名	100%	¥2,058,000
4 【通常】ACRLS単独参加費 (日本人) *Doctor, Medical Staff, Others	21,000	20	名	100%	¥420,000
5 【通常】ACRLS単独参加費 (日本人) *銀行振り込み	21,000	1	名	100%	¥21,000
6 【通常】ACRLS単独参加費 (海外) *Doctor, Medical Staff, Others	21,000	11	名	100%	¥231,000
7 【通常】JSES+ACRLS合同参加費 (日本人)	3,000	292	名	100%	¥876,000
8 JSES招待、ACRLS追加購入3,000円 (日本人)	3,000	23	名	100%	¥69,000
9 クレジットカード決済手数料 (ACRLS単独のみ)	-29,238	1	式	100%	¥-29,238
10 クレジットカード決済手数料 (JSES+ACRLSの3,000円分)	-83,232	1	式	100%	¥-83,232
11 クレジットカード決済手数料 (JSES招待、ACRLS追加購入3,000円 (日本人))	-1,950	1	式	100%	¥-1,950
<b>II 共催セミナー (JSESとの共同開催、全体の15%按分後)</b>		<b>43</b>	<b>枠</b>		<b>¥15,900,000</b>
<b>III 展示出展料 (JSESとの共同開催、全体の15%按分後)</b>		<b>312</b>	<b>小間</b>		<b>16,751,250</b>
<b>IV 広告関係費</b>		<b>4</b>	<b>枠</b>		<b>1,771,000</b>
1 抄録集 (表4)	550,000	1	枠	100%	¥550,000
2 抄録集 (表3)	330,000	0	枠	100%	¥0
3 抄録集 (表2)	330,000	1	枠	100%	¥330,000
4 抄録集 (後付1)	132,000	0	枠	100%	¥0
5 抄録集 (後付1/2)	66,000	2	枠	100%	¥132,000
6 ホームページ バナー広告	440,000	0	枠	100%	¥0
7 ハンディ日程表 *JSESとの按分後 (15%)	1,100,000	0	枠	15%	¥0
8 幕間広告 *JSESとの按分後 (15%)	880,000	2	枠	15%	¥264,000
9 受付装飾 *JSESとの按分後 (15%)	2,200,000	1	枠	15%	¥330,000
10 VIPラウンジ装飾 *JSESとの按分後 (15%)	1,100,000	1	枠	15%	¥165,000
<b>V その他</b>					<b>¥7,092,115</b>
1 寄付 (製薬会社等)	3,300,000	1	式	100%	¥3,300,000
2 日薬運寄付	657,000	1	式	100%	¥657,000
3 刀林会寄付	935,000	1	式	100%	¥935,000
4 学会助成金	0	1	式	100%	¥0
5 名古屋市助成金	2,200,000	1	式	100%	¥2,200,000
6 利息	115	1	式	100%	¥115
<b>合計(税込み)</b>					<b>¥45,452,945</b>

■支出

項目	合計
<b>I 事前準備費</b>	<b>¥23,797,917</b>
1 事務局人件費	8,446,955
2 事務局雑費	115,940
3 接遇業務費	2,165,900
4 企業協賛活動業務費	183,920
5 広報・渉外業務費	54,450
6 制作費	5,985,042
7 サイドイベント業務費	0
8 プログラム編成業務費	5,816,445
9 事前登録業務費	1,029,266
10 実費 (立替金)	0
<b>II 当日運営費</b>	<b>¥21,459,148</b>
1 会場関係費	4,711,320
2 招請者関係費	3,283,432
3 飲食・会合・行催事関係費	1,117,949
4 輸送・ツアー関係費	0
5 映像機材費	8,118,640
6 看板・ポスターパネル関係施工費	927,054
7 展示会場関係費	0
8 設営・撤去 (看板・ポスターパネル・展示)	0
9 運搬関係 (看板・ポスターパネル・展示)	0
10 CARM (参加受付自動機) 利用経費	387,200
11 ランチョンバスポート (整理券自動発券機)	0
12 運営要員関係費	2,908,934
13 記録関係費	0
14 同時通訳関係費	0
15 諸雑費	4,620
16 実費 (立替金)	0
<b>III 事後処理費</b>	<b>¥195,880</b>
1 旅費交通費	0
2 会議費	0
3 通信費	195,880
4 会計監査費用	0
5 実費 (立替金)	0
6 制作費	0
<b>合計(税込み)</b>	<b>¥45,452,945</b>

## 刀林新聞電子化 アンケート集計結果

刀林会会員管理システム メールアドレス登録者 936名のうち、371名より回答

刀林新聞電子化について

賛成 362名

紙媒体での送付を希望

27名

電子媒体での送付を希望

335名

反対 9名

紙媒体での送付を希望

9名

電子媒体での送付を希望

0名

刀林会会員管理システム メールアドレス未登録者 170名のうち、71名より回答

刀林新聞電子化について

賛成 47名

紙媒体での送付を希望

20名

電子媒体での送付を希望

24名

記載なし

3名

反対 24名

紙媒体での送付を希望

24名

電子媒体での送付を希望

0名

受賞報告

Surgery Today 第1回 Citation Award

Current management strategies for visceral artery aneurysms: an overview

Surg Today 2020;50:38-49

第123回日本外科学会定期学術集会 優秀演題賞

慶應義塾大学医学部外科学

(一般・消化器) 准教授

尾原 秀明 (72回)

2022年度 (令和4年) 慶應医学会「野村達次賞」

慶應義塾大学医学部

外科学 (一般・消化器)

八木 洋 (77回)



この度私の review 論文が、英文誌 Surgery Today の第1回 Citation Award を受賞いたしました。Surgery Today 誌は1971年に創刊された英文の日本外科学会オフィシャルジャーナルで、長い歴史のなかで2023年より、論文の引用が多く行われ本誌の Impact Factor 向上に寄与した論文の著者に対し Citation Award が授与されることとなり、私が記念すべき第1回目の受賞者となりました。2020年に発行50周年を迎える本誌は、あらゆる quality と Impact Factor の向上に努めるにあたり、50周年記念となる Review を企画し、幸運にもその執筆依頼(血管外科領域)が日本外科学会より私にございました。大変ありがたいことに、本論文は2年間の被引用数が50を超え、責務を果たせたのではないかと安堵しております。受賞論文の Current management strategies for visceral artery aneurysms: an overview は、腹部内臓動脈瘤に関する論文です。腹部内臓動脈瘤は比較的稀な疾患で、その治療適応や治療方法については未だ議論も多く、適切な治療方針決定に難渋することが少なくありません。当院では、一般消化器外科と放射線診断科がチーム医療により長年にわたり本疾患の治療にあたり、外科的に行わなかったり、外科的に行再建術とカテーテル治療を適切に組み合わせることで国内トップクラスの症例数と治療実績がございます。受賞論文は当院での症例を具体的に提示しながら、わかりやすく内臓動脈瘤を総説しており、このことが読者に高く評価されたものと考えております。

一方、本年2023年度の日本外科学会定期学術集会で、公募演題応募総数3,152演題から私の発表が優秀演題賞に選



Surgery Today 誌 第1回 Citation Award 受賞



この度、Development of Organ Regenerative Therapy by the Whole-Organ Scaffold Technology using Clinically Relevant Porcine Models に対し、2022年度慶應医学会「野村達次賞」の受賞を賜りましたことをご報告申し上げます。野村達次賞は、「In vivo 実験医学」を長年に亘り牽引された野村達次先生(24回)のご業績を永くたたえらるため、2014年に慶應医学会によって創設されました。野村達次先生は1945年に本学医学部を卒業後、感染症を中心に研究を続けながら、実験動物の質の低さの結果として、医学研究のレベルが向上しない事に気づき、世界最高の動物実験システムの構築を目指して1952年に実験動物中央研究所を設立なさいました。2013年1月11日に90歳で逝去されましたが、先生の思いは脈々と後輩に受け継がれております。私は2010年に米国留

出されました。血行再建を有する高難度腹部手術では臓器合併切除と消化管再建を伴うことが多く、感染予防の観点から自家大腿静脈グラフトは極めて有用です。当科では2012年より大腿静脈グラフト(FVG)を導入し、現在まで80件の血行再建に使用しております。このFVGを用いた代表的な高難度手術症例を3例(①肝部下大静脈背側の再発性巨大後腹膜腫瘍に対し ante-stium 法肝切除

スタッフ、MEセンター等から最大限のサポートをいただきながら、当科と心臓血管外科との密な連携を基盤として実現し、大教室制である外科学教室だからこそ成し得るものであります。今後も、慶應のチーム力と総合力を存分に発揮して精進してまいりますので、ご指導のほど何卒よろしく申し上げます。

マイクロミニブタに異種移植を実施し、本システムの有用性を示すことができました。留学から10年の時間を要しましたが、再生臓器開発から移植までをシームレスに繋ぐ世界でも類を見ないシステムを構築することができ、臓器再生医療実現化への扉を開いた成果が、今回高くご評価をいただいたものと考えております。最後に、米国留学のご推薦を賜りました故北島政樹名誉教授(45回)、学位指導を賜りました故上田政和准教授(53回)、本研究の実現化に多大なるご尽力を賜りました北川雄光教授(65回) および肝胆膵移植班スタッフの先生、ならびに本実験に携わった多くの外科大学院生の先生に篤く御礼を申し上げます。

# 第49回日本胆道閉鎖症研究会優秀演題賞 (臨床部門)

都立小児総合医療センター

富田 紘史(84回)

令和4年12月3日に開催された第49回日本胆道閉鎖症研究会にて、「術前データによる胆道閉鎖症手術成功率の層別化と一次肝移植適応基準作成のための多機関共同後方視的調査研究」というテーマで優秀演題賞(臨床部門)を受賞しました。本研究会は小児外科、小児科、小児病理、移植外科など多様な領域からの参加で構成された長い伝統と大きな実績のある研究会であり、今回は小児外科の黒田達夫教授(61回、当時)が「未来への遺産…胆道閉鎖症の生涯的管理」というテーマで会長を務められました。

胆道閉鎖症は乳児期早期に胆汁うっ滞から肝硬変に至る疾患で、胆汁うっ滞を改善させるための葛西手術の成功率は60〜70%に留まっております。小児肝移植の最も一般的な適応です。私の胆道閉鎖症との出会いは医学部6年時のポリクリに廻ります。当時の森川康秀教授指

導の下、当時医師8年目だった下島直樹先生が執刀していた手術に参加させて頂いたことをよく覚えております。外科出張を終えて帰宅後、何もないのつべりと室後、何も無いのつべりとした肝門部に腸管を吻合する葛西手術の内容に改めて衝撃を受け、肝移植に携わられたこともあって胆道閉鎖症に対する興味は深まる一方で、臨床研究のテーマとしてきました。今回受賞した研究はシリーズ3作目となります。

手術成功率を層別化しようとするもので、全国の施設に協力を呼びかけ、全国の5年分383名(78.6%)の患者データを集める大規模なものとなりました。結果、BALF scoreが5・27以上の場合に葛西手術成功率が10%程度しかないと見出ししました。そのような患者さんは全体の4.7%と多くはありませんが、葛西手術後肝不全のリスクが高いと考えており、そうなった場合は緊急肝移植が必要になったり、肝移植成績に悪影響を及ぼしたりする可能性があるため、葛西手術だけではなく、一次肝移植の適応も検討すべきであるという結論に至っています。

今回の受賞を励みに、今後も胆道閉鎖症診療の発展に尽力していきたいと考えております。今後もご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いたします。



富田 紘史(左)と黒田達夫教授(右)が授賞状を授け合っている様子。

最初の研究は当教室で行われた肝生検の結果から1歳以上の胆道閉鎖症の肝線維化予測式として「biliary atresia liver fibrosis (BALF) score」を作成するものでした。次の研究は当教室関連3施設の研究で、1歳未満の肝線維化予測式の作成と検証を行ったもので、予測式は「Infantの頭文字」を付けて若干流りに乗った気になり、BALF scoreと名付けました。今回の研究は、術前のBALF scoreを基準に葛西

## 病院紹介

### 地方独立行政法人 栃木県立がんセンター



病院長

安藤 二郎(64回)

栃木県立がんセンターはがん専門病院として、「検診から治療まで」の一貫した診療体制の確立を目的として、昭和61年9月に開院しました。平成19年には都道府県がん診療連携拠点病院に指定され、栃木県におけるがん医療の中心的機関として、高度で専門的な医療の提供を実施するとともに、栃木県のがん対策・医療連携等を推進する中心

的な役割を担ってまいりました。さまざまながんの病態に応じ、手術、放射線療法、薬物療法を効果的に組み合わせた集学的治療が実施可能であり、他施設では対応が困難な難治がん、高度進行がん、再発がんなどの患者さんを積極的に受け入れ、高度な技術を駆使した手術はもちろん、患者さんとのQOLの向上を図るために各種の治療やケアを行っています。出身大学などは問わず、各診療科間の協力は体制は緊密で、大学病院などでは見られない「小回りのきく」診療体制は、当センターの大きな特徴でもあります。平成28年に地方独立行政法人に移行し、今年で地方独立行政法人として8年目を迎えます。地方

の特長である「自律性」「機動性」「透明性」を活かし、希少がんセンター、バイオバンクセンター、ロボット支援手術センター、患者支援センター、感染症対策センターなどの各種新規事業の立ち上げや人事・組織再編などを実施してまいりました。また令和3年より進めてきた5大事業(病院事業、研究事業、臨床研究管理事業、バイオバンク事業、がん対策推進事業)も軌道にのりつつあり、がん対策を含むがん臨床からトランスレーショナルリサーチまで対応できる形となりつつあります。



今後がんセンターとしての質の高い医療の提供と地域医療への貢献を果たしつつ、病院運営基盤も高めていきたいと考えております。刀林会の先生には益々のご指導、ご支援をよろしくお願いたします。

病院紹介

けいゆう病院

けいゆう病院は、神奈川県横浜市の西区と中区にまたがり、横浜港に面している再開発地域である「みなとみらい21地区」にある地域中核病院です。

昭和8年当時、警察病院の建設は多年にわたり緊急案件として検討され、神奈川県知事、警察部長をはじめとする多くの関係者のご尽力により、警察病院の設立が決議されました。



ところが当時の県財政は非常に苦しく、関東大震災の復興もままならない状況で、警察・消防職員の拠出金を基に両陛下の御下賜金や篤志家の寄付を仰いで警友会が発足し、昭和9年5月2日に警友病院が竣工して医療活動を開始しました。

ナリテイナーという3つのメインターームを掲げて、快適な院内環境のもとに最先端の医療設備を整え、国内外の要人や外国人への対応もできる病院をめざし、病院内も警友病院から「けいゆう病院」と変更し現在に至っております。常勤医師116名、非常勤医師61名、初期研修医10名、一日外来患者数1000余、診療科33科、2022年度総手術件数5004件、病床数410床の急性期総合病院です。おもな診療機能として地域医療支援病院、神奈川県がん診療連携指定病院、地域災害拠点病院、神奈川県DMAT指定病院などの指定を受

けております。各診療科部長は麻酔科を除いて全員慶應義塾医局出身者です。外科は松本秀年(院長65回生)、乳腺 嶋田昌彦(ブレストセンター長58回相当)、坂田道生(68回相当)、麻賀創太(乳腺外科部長77回生)、消化器外科 関博章(部長74回)、西知彦(消化器外科部長83回)、松田睦史(副部長88回)、松本航一(専攻医)、呼吸器外科は橋本諒(東海大)で診療を行っており、2022年度の総手術件数は1120件で、乳癌196例、食道癌8例、胃癌29例、大腸癌111例、胆道悪性28例、肺癌34例の悪性腫瘍手術に取り組み、急性腹症等の緊急手術も応需しております。尚、ESD、ERCP等の内視鏡的処置は外科で行っております。当院外科の特徴は乳腺班の充実(3名)、一方、消化器外科は3名、スタッフの高齢化があり、生き残る道は初期研修医・見学生の手術での活用です。



病院長 松本 秀年 (65回)

また、当院は2019年よりda Vinciを導入し、泌尿器科領域130例、外科では幽門測6例、噴門測3例、胃全摘1例、食道1例、直腸19例、鼠径ヘルニア10例と症例を重ねております。

近年、近隣にザ・カハラ・ホテル、ウエスティンホテル、パシフィック横浜ノースも開業し、学会参加の折には是非ともお立ち寄りください。

新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが5類に移行し、2023年はWithコロナの状態での病院機能の回復、さらには発展できるかどうか問われる重要な年であると考えています。最後に慶應義塾関連病院として若手外科医の育成とともに地域医療の発展に取り組んでまいりますので刀林会の皆様におかれましては益々のご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

留学記

Massachusetts General Hospital 留学記



猪股 研太(87回)

2022年5月に渡米し、同年12月より米国ボストンのマサチューセッツ総合病院に留学させて頂いております。猪股研太と申します。私は現在、Nephrology division/Morizane 研究室で森實隆司先生にご指導頂いております。森實先生は、慶應腎臓内分泌代謝内科学教室の出身で2012年からハーバード大学へ研究留学され、多能性幹細胞から腎オルガノイドをより効率的に生成するプロトコルを開発されました。当研究室では腎オルガノイドを用いたin vitroでの疾患モデル作成や病態解明、薬剤応答などに関する研究を行っております。私はその中で、一部の疾患関連遺伝子についてのテーマを頂き、ウィルスベクターによって形質導入したCRISPRからオルガノイドを作成し、遺伝子発現測定や機能評価などを行っております。これまで臨床では縁遠かった腎組織ですが、複雑な3次元構造を持つ実質臓

器の再生医療という点で、私が大学院で勉強させて頂いていた肝再生研究との共通点も多く、大変興味深く感じながら日々研究に励んでおります。ボストンにはハーバード大学やマサチューセッツ工科大学など世界的に評価の高い研究施設が多く、世界中から研究者や留学生が集まっております。研究室の内外で様々なコミュニケーションが広がり、刺激を受けることも多いです。また、今回は妻のボストンでの大学院進学が先に決まり、渡米から半年は主夫としての生活を始めました。慣れない家事の修練と育児に追われる日々は、言葉や文化の違い以上に大きな変化を経験しましたし、家族と向き合うかけがえのない時間を得ることができました。昨年末から私の勤務も始まりましたが、休日は家族や妻の同級生と出かけたり、旅行に行ったりと充実した日々を送っております。物価高や円安の影響、言語の壁を感じ

ることもありませんが、それ以上に新たな出会いや新鮮な体験を大変貴重に感じております。このように得難い経験の中で、少しでも多くを吸収できるよう精進して参ります。

最後になりましたが、留学に際し大変御高配を賜りました北川雄光教授、尾原秀明先生、北郷実先生、ならびに外科学教室、刀林会の先生方に深く感謝を申し上げます。

円安の影響、言語の壁を感じ

# 中山醫學大學附設醫院



中野 容(90回相)

私は2023年3月か  
ら、台湾の中山醫學大學附  
設醫院 一般外科 達文西微  
創手術中心 (Chung Shan  
Medical University Hos-  
pital, Department of  
General Surgery, da  
Vinci Minimally Invasive  
Surgery Center) に留学  
させていだいておりま  
す。私がお世話になってい  
る彭正明先生は、一早くロ  
ボット手術に取り掛かり、  
これまで何千例ものロ  
ボット手術を執刀してきま  
した。私の専門分野である  
肝胆膵のみならず胃、大腸、  
甲状腺など一般外科医とし  
て様々な分野の手術をロ  
ボットで行なっています。  
従っていま私は肝胆膵のみ  
ならず一般外科医として  
様々な手術に参加しており  
ます。多くの手術はロボッ  
ト手術になりますが、腹腔  
鏡手術や開腹手術も行いま  
すので、外科医として非常  
に恵まれた環境です。ポス  
トチーフとして、2年間済  
生会横浜市東部病院で、そ  
の後3年間慶應義塾大学病  
院で若手スタッフとして研鑽  
を積み上げていただきました。

台湾は親日国ですので、  
ある程度知識や技術  
を得た状態で留学しまし  
たが、やはり他国で手術を  
したり、自分の考えを示し、  
信頼を得ることは容易では  
ありません。もちろん言語  
の壁もありますし、台湾に  
は台湾独自の、また私が所  
属するチーム独自のやり方  
がありますので、まずはそ  
れに慣れることが先決で  
す。

いまの私にとって全てが  
挑戦です。大げさな表現で  
すが、海外へ挑戦するス  
ポーツ選手と同じようなも  
ので、自分の実力が出せれ  
ば評価され、逆にできなけ  
れば少し心配される目で見  
られたり、常に皆から評価  
されています。若くして  
様々なことに挑戦できるこ  
の留学は、私にとって刺激  
的であり、かつ自分の手術  
の実力を伸ばしてくれると  
信じています。特にロボッ  
ト手術なのでほとんど自分  
で視野をつくり、時にアシ  
スタントに指示をだし、判  
断もほとんど自分に委ねら  
れます。まさに私が欲して  
いた環境です。これからの  
挑戦し続けます。

原秀明先生、北郷実先生  
あたたく支援してくださ  
いました関連病院の先生  
方、慶應義塾大学外科学教  
室、刀林会の皆様に心より  
御礼申し上げます。

台湾は親日国ですので、  
ある程度知識や技術  
を得た状態で留学しまし  
たが、やはり他国で手術を  
したり、自分の考えを示し、  
信頼を得ることは容易では  
ありません。もちろん言語  
の壁もありますし、台湾に  
は台湾独自の、また私が所  
属するチーム独自のやり方  
がありますので、まずはそ  
れに慣れることが先決で  
す。

いまの私にとって全てが  
挑戦です。大げさな表現で  
すが、海外へ挑戦するス  
ポーツ選手と同じようなも  
ので、自分の実力が出せれ  
ば評価され、逆にできなけ  
れば少し心配される目で見  
られたり、常に皆から評価  
されています。若くして  
様々なことに挑戦できるこ  
の留学は、私にとって刺激  
的であり、かつ自分の手術  
の実力を伸ばしてくれると  
信じています。特にロボッ  
ト手術なのでほとんど自分  
で視野をつくり、時にアシ  
スタントに指示をだし、判  
断もほとんど自分に委ねら  
れます。まさに私が欲して  
いた環境です。これからの  
挑戦し続けます。

原秀明先生、北郷実先生  
あたたく支援してくださ  
いました関連病院の先生  
方、慶應義塾大学外科学教  
室、刀林会の皆様に心より  
御礼申し上げます。



手術室で上司、同僚と記念撮影

## 留学成果報告

### ミシガン大学心臓外科



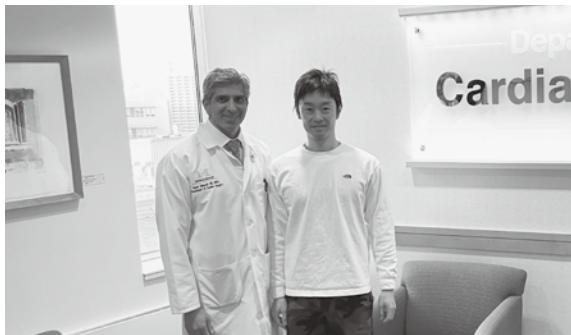
済生会横浜市東部病院  
心臓血管外科  
稲葉 佑 (90回相)

私は、米国胸部外科学会  
及び日本胸部外科学会共催  
の留学プログラムにて、2  
022年8月から11月の3  
か月間ミシガン大学心臓外  
科へ短期留学致しました。

私が滞在していた約3カ  
月間は Steven Boiling 教  
授にホストを務めて頂きま  
した。その間、計387例  
の手術症例があり、そのうち  
103例を見学することが  
出来ました。僧帽弁手術  
に関する数多くの臨床研究成  
果を発表されていたことな  
どです。

目的に形成されていまし  
た。Transcatheter Mitral  
Valve Replacement (TMVR) / MitraClip など  
のカテーテル治療も僧帽弁  
外科医が主体的に治療に参  
加しており、従来の外科治  
療に加え、新しい手技も積  
極的に取り入れて行く姿勢  
を学びました。大動脈弁手  
術に関しては、ミシガン大  
学の臨床データとSTS  
データを基に TAVR の  
Limitation が判明しつつあ  
り、将来の安全かつ長期的  
な成績が担保され得る  
TAVR in SAVR を見据え、  
全体の SAVR 件数のうち  
約40%に積極的弁輪拡大  
+ SAVR が行われて  
おりました。また成人の  
大動脈弁疾患に対する  
Ross 手術も行われてお  
り、人工弁との長期比較  
研究において、Ross 手  
術の生存曲線が general  
population とほぼ同じ  
であることを示した近年  
の報告と相まって、今後  
注目すべき術式と感じま  
した。ほかにも、慢性B  
型解離において中隔壁の  
レーザー fenestration

による有効な末梢 landing  
zone の作成や常温順行性  
脳灌流の取り組みなど、自  
施設の研究データを基に現  
状の問題点を把握し、既存  
の概念を突破すべくダイナ  
ミックに術式を開発してい  
く academic surgeon 達の  
姿勢は大変刺激的でした。  
ミシガン大学は、心臓外  
科レジデントプログラムの  
中でもトップクラスの人気  
であり、全米の心臓外科志  
望のレジデントの中でも、  
特に優秀な人材が集まって  
いるとのことでした。短期  
間だけではありましたが、  
彼らの手術に対する真摯な  
姿勢、マインドを直に体感  
出来たのは貴重な経験とな  
りました。



このような貴重な機会を  
頂きました。志水秀行教授、  
刀林会国際委員会八木洋先  
生、済生会横浜市東部病院  
の先生方、留学中援助を頂  
きました刀林会三橋記念国  
際交流基金、済生会横浜市  
東部病院、済生会本部高松  
宮基金及び家族に感謝の意  
を表し留学報告いたします。  
す。

このような貴重な機会を  
頂きました。志水秀行教授、  
刀林会国際委員会八木洋先  
生、済生会横浜市東部病院  
の先生方、留学中援助を頂  
きました刀林会三橋記念国  
際交流基金、済生会横浜市  
東部病院、済生会本部高松  
宮基金及び家族に感謝の意  
を表し留学報告いたします。  
す。



# 第三の人生

## 「零歳より百歳まで」をモットーに



岡村一心堂病院  
総合診療科・外科  
上野 滋 (57回)

ふるさとである岡山に居を移し、岡村一心堂病院に2021(令和3)年4月より勤め始めた。親元を離れるまでの第一、小児外科医として努力した第二、に続く第三の人生の始まりである。長年奉職した東海大学を定年退職し、関東で骨をうずめたいという思いより存命の両親への報恩の思いのほうが強かった結果である。転居に同意してくれた妻には感謝しかない。

た妻には感謝しかない。とはいえ、研修医時代とその後パートでしか成人診療を経験していない自分が、「救急、がんと心臓疾患を中心に、かかりつけ病院としての地域医療」を掲げる病院で働くのは無謀と言

われても仕方がない。2年間非常勤医として働きながら、書籍を読んだり、まわりのスタッフに訊ねて学んではきたが、常勤となった今も診療は綱渡りのである。しかし、日々の診療は新鮮である。自分より年配の患者の生きざまや旅立ち、生活習慣病をかかえた中高年患者とのやりとり、認知症高齢者やその家族への対処に従事する一方、これまで培ってきた小児便秘診療にも携わり、「零歳から百歳まで」をモットーに元気に勤務している。

両親はこの4年間に他界し弔いを果たした。母はコロナ禍直前に94歳で、父はコロナ第7波のさなか97歳での大往生であった。父は自ら救急搬送して、3か月間毎日のように顔を合わせ、当院から旅立たせてあげられたのはせめてもの孝行だと思っ

ている。後文になって恐縮であるが、同じ57回生である椿原彰夫君(川崎医療福祉大学学長)が「三四会百歳の国」の幹事を務めておられる。「中国地方に限らず、地方都市から慶應医学部に入學している学生が少なくない(岡山県は暫くゼロ、昨年は広島県から1人)」とのこと、コロナ禍で一堂に会することができていないが、今後は地域の同窓の方々とも交流を深め、「関東慶應大学」になつてしまわないよう、地域から「世界に冠たる」母校を支えたいと思う。

「食べて、動いて、考えること、これすなわち生きること」がもう一つのモットーである。昨年10月岡山市で開かれた直腸肛門奇形研究会(会長黒田達夫君(61回))の折に小児外科の仲間と宴を設け(写真)、地元食材を味わいながら楽しいひとときを過ごした。「有朋自遠方来、不亦楽乎」近くにお寄りの節はぜひ声をおかけいただきたい。動くこと、徒歩通勤と週2日のジム通いが日課である。そのうち四国八十八か所を巡り歩きたい。考えること、3年前から短歌を詠みはじめ、昨年歌集「帰岡」を上梓した。何年間働けるかわからないが、元気に診療を続け、「第三の人生」を送りたい。

この度は刀林回新聞「なでしこ外科医」への寄稿としてしこ外科医への寄稿という貴重な機会を頂きまして誠にありがとうございます。90回相当の小林可奈子と申します。

学生の頃から心臓血管外科に興味がありました。科に興味がありませんでしたが、体力面での不安や技術習得までの長い道のりもさることながら、当時現役で活躍

### なでしこ外科医



済生会中央病院  
心臓血管外科  
小林可奈子 (90回相)

さされている女性医局員がいらつしやらなかつたこと。多少の逡巡はありました。しかし志水教授はじめスタッフの先生がたの温かい雰囲気の中で背中をおされ入局をさせて頂きました。

入局後は済生会宇都宮病院へと出向させて頂き、大腸外科のチーフ業務を終えて現在は済生会中央病院にて手術経験を積み上げていただいております。今年3月にご退職された大坪先生には、手術手技を習熟させるための直向きさや外科医としての責任・姿勢、患者様への心配り等多くのことを教えて頂きました。また、血管外科の原田副院長、藤村先生にもステントグラフト手術をはじめ、学会発表

や論文制作についてもご指導を頂き大変感謝しております。2020年に長女を出産し約1年の育児休暇後に復帰を致しました。開心術は急変の可能性もあるため、時間の制約がある育児をしながらというのは困難が生じます。夫も医師のため不在のことが多く、以前は「出産後は、開心術を続けることは難しいだろう」と考えておりました。ですが、志水教授から「女性心臓血管外科医が家庭と仕事を両立できるようなしていきたい」というお話を伺い、その心強い激励とご支援のもと、大坪部長とともに家庭と仕事を両立していくにはどうしていくべきかを話し

たい、先輩や同僚の助けもお借りしながら、少しずつ現場復帰をさせて頂けるようになりました。現在女性の心臓血管外科専門医は決して多くなく、またその中でも育児をしながら業務にあたっている女性医師はほんのわずかです。自らの努力はもろくも必要ですが、今後女性外科医が増えていく中で出産育児と両立できるような働き方を模索していく必要があると、今後入局して頂けるであろう若い女性外科医たちのロールモデルになれるよう、より一層精進していきたいと思っております。今後とも皆様のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。

と、患者に不利益となる。画像診断については今後はこれが一助となるのか。これまでたくさんの先生にお世話になり、学ばせていただいた。乳腺科は女性患者が多く特殊な部位であり、病室のカーテンの閉め方ですらすらつくって下さった先生もいた。

### 『私は乳腺科医である。』



河合 佑子 (92回相)

私は乳腺科医である。外科医でも内科医でもなく。いまや乳腺科は女性医師があふれ、むしろ男性医師が少なくなりつつある分野である。「なでしこ外科医」のコラムであるが、身近に医師がいた影響もあるが、小学5年生の時に近視で通院していた眼科医に憧れ、母校東京医科大学病院の研修医の時に意気揚々と眼科をローテートし

た。しかし一部でまるで宇宙のようと言われる眼底写真に全く興味が持てず挫折、どの科へ行くか路頭に迷った。手技のある科に行きたい一方で、内科的な面も持ち合わせている乳腺科を丁度その頃周り、こんな面白い科はない、と行き先が見つかりほっとしたのを覚えている。実際に入局してみると、診断から治療、緩和まで診られることにな

りがいを感じ、手術もとても楽しかったが、薬物療法も進歩が目覚ましく基礎からしっかりと学びたいと思いつ、ハイポリウムセンターへ出向、そこで化学療法科、乳腺外科、病理診断科と多岐に渡り学ばせて頂いた。その頃約10年前であるが、アメリカの病院を見学させて頂いた時、既に細分化されていて驚いた。外科、内科、放射線科、緩和

ケアと。外科医は画像が読めず、生検は放射線科が行い、外科医はマークが留置されたその部位を切除していた。君は放射線科医じゃないのにマンモグラフィが読めるのか」と驚かれ、マンパワーの違いを感じた。日本でも今後は乳腺外科と乳腺内科に分かれるのが一般的になるのだろうか、私の目の黒いうちは難しいかもしれないが、ただ、日々診療をしていると細分化の良さも実感する。浸潤癌を1年後経過観察とされてきた症例、腋窩リンパ節転移を半年後経過観察とされてきた症例：自分も気を付けなければと思いつつ、定期通院をしつかりしていた患者の立場を考えるとどうしたら改善されるのかと時に悲しくなる。診断、治療、その何処かに綻びがある

り特に薬物療法は毎年新薬が承認されるが、患者に必要な情報を届けられる医師でいられるよう日々精進していきたい。



小児外科の仲間たちと(2022年10月岡山にて) 提供下島直樹君(76回生) た。父は自ら救急搬送して、3か月間毎日のように顔を合わせ、当院から旅立たせてあげられたのはせめてもの孝行だと思っ

ている。後文になって恐縮であるが、同じ57回生である椿原彰夫君(川崎医療福祉大学学長)が「三四会百歳の国」

帰室報告



横江 隆道(88回)

私はポストチーフとして国立がん研究センター東病院乳癌外科で約2年間修練したのち、2021年1月より2年間、米国カリフォルニア州サンタモニカにある Saint John's Cancer Institute (SJCI) 旧 John Wayne Cancer Institute) に留学させていただきました。留学期間、格別のご高配を賜りました北川雄光教授、尾原秀明先生、林田哲先生、大西達也先生、

日頃よりご支援賜っております刀林会の皆様にご心より御礼申し上げます。SJCIでは、古くから Saint John's Health Center (SJHC) より提供される豊富な臨床検体を用いて、悪性黒色腫、乳癌、消化器癌などの橋渡し研究が盛んに行われております。私の所属していた Department of Translational Molecular Medicine は、Dr. David S.B. Hoon が研究室の責任



林 応典 (91回)

外科学(一般・消化器)91回生の林応典(まさのり)と申します。

私は平成24年に慶應義塾大学医学部を卒業し、2年間を東京歯科大学附属市川総合病院にて初期臨床研修させていただき、平成26年に当教室へと入局いたしました。外科専修医として3はさいたま市立病院、4は佐野厚生総合病院にて研鑽を積み、外科医としての基礎を学ばせていただきました。平成28年に慶應義

塾大病院へと帰室し、専門班の選択においては、学生時代から豚ドライラボでの血管吻合練習に参加させていただいたこと、東京歯科大学市川総合病院で原田裕久先生に血管外科について様々なことを指導していただいたことをきっかけに、尾原秀明先生にお声をかけていただき血管班に所属いたしました。血管班は人数こそ多くはないものの、多数の手術や他科との合同手術の多さ、また肝移

者を務めており、今まで数々の外科学教室の先輩方がご留学され、多くの研究業績を積み上げております。私は、乳癌の薬物療法耐性メカニズム、悪性黒色腫のバイオマーカーなど、様々な研究に参加させていただきました。特に中心的に携わった研究として、乳癌の PARP 阻害薬耐性に関して、miRNA や stimulation of interferon genes (STING) に関連した研究があります。この分野は、バイオマーカーやがん免疫療法において、今後発展が期待されており、帰国後も研究を継続したいと考えております。その他にも、exosome と呼ばれる細胞外小胞体を用いた研究や、FUE 切片から位置情報を保持したまま遺伝子発現解析を行う技術を用いた研究など、最新の機器を使用し

た研究にも触れることができました。留学生活を通じ、研究の考え方や個々の手法、臨床の疑問をどのように研究に発展させていくかなど、多くのことを学び考えることができました。また、米国の研究者だけでなく、中東・南米やアジアなど様々な国から渡米している研究者とコミュニケーションを取ることで、研究面での刺激を受けるだけでなく、各国の文化についても学ぶ機会を得ることができました。2023年2月より、当教室乳癌班スタッフとして帰室させていただくこととなりました。今までの経験を活かし、診療・研究・教育において慶應義塾に貢献できればと考えております。今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

令和3年3月7日、慶應義塾大学医学部名誉教授であられました阿部令彦先生が逝去されました。1973年から18年の長きにわたり教授として、またその後長くご指導いただいた我々教室員、刀林会会員にとりまして例えようのない喪失であり、直ちに教室葬をとお考えました。しかしながら、当時 COVID-19 の全国的な蔓延があり、ご遺族様のご配慮もいただきながら令和4年6月18日に慶應義塾大学医学部外科教室として北里講堂にて葬儀を執り行いました。

教室幹事、尾原秀明准教授の進行で、葬儀委員長を務めた北川雄光教授より開式の辞が述べられ、その後黙祷が捧げられました。続いて医学部長金井隆典先生より告別の辞として、阿部先生の慶應外科における数々の業績と貢献についてお話をいただきました。次に、外科学教室同窓会刀林会理事長として、独立行政法人国立病院機構東京医療

センター名誉院長の松本純夫先生より、阿部先生が当時広く教室員の意見を取り入れながら臨床・研究に尽力されたこと。また教室員がそれに対して深い信頼を寄せていたことを感慨深く振り返られました。次いで再辞をいただいた日本乳癌学会名誉理事長の池田正先生からは、阿部先生が日本乳癌学会の設立および黎明期の発展に大変貢献されたことや、教授であった当時の医局内の雰囲気そのありようがまざまざと目に浮かぶようにご紹介くださいました。式中を通じて、阿部先生が生前親交のあった指揮者の西本智実様をご用意くださった、弦楽四重奏の生演奏が厳かな雰囲気を作り出し、西本様の音楽に対する情熱を阿部先生が優しく後押しされていたエピソードも披露されました。最後にご遺族を代表して窪地淳先生より、また主催者を代表して教室主任の浅村尚生先生より会葬の御礼を申し上げ、参列者の皆様にご献

花をいただきました。教室葬当日はご多忙の中約200名の方々にご参列いただいたほか、多くの皆様からご供花をいただきました。主催者を代表して心より御礼申し上げます。最後にあらためまして阿部令彦先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

慶應義塾大学医学部外科学 (一般・消化器) 林田 哲 (77回)

教室葬報告

阿部令彦名誉教授 教室葬報告



近況報告

53回生



池田 正 (53回)

昔はストレート入局だったので、外科に入ってから来年で丁度50年、乳腺外科を専門としてから46年となりますが、今なお現役で手術をしています。卒後はチーフ出張の1年半および栃木県立がんセンター開院のための5年間を除きずつ

と学内におりました。2006年からは帝京大学に移り、副院長、外科主任教授を最後に引退しました。その後何らかの縁があった、帝京大学新宿クリニック、北里大学北里研究所病院、多摩丘陵病院に非常勤で勤務させて頂いてます。徐々にTMDを減らし、今年からは週4日(実質3日)としています。時間ができた分、ゴルフ、旅行、読書など趣味の時間を増やしています。子供たちは独立し、家内と二人暮らしですが、外出比率が徐々に逆転しつつあります。末筆ながら教室の今後ますますのご発展を祈念しています。



石川 廣記 (53回)

11年在籍したけいゆう病院を辞し、医療法人社団相和会の新規開設したみなとみらいメディカルスクエア院長に2008年1月1日に就任しました。人間ドックが主の総合健診センターに、クリニック(内科・外科・婦人科外来)が付設さ

れた医療機関です。そこで健診では診察業務と、外来では主に一般外科を担当し、消化器外来では上部消化管内視鏡を、また乳腺外来ではVAB生検(主にマンモトーム)も行っています。幸い、がん研有明病院や神奈川県立がんセンター等からの乳癌術後の経過観察、良性腫瘍疑いの患者さんの紹介も多く、その他に3企業の嘱託産業医もしており、忙しくさせて頂いていただいています。この3年難渋してきたコロナ禍が5月8日に5類になりましたが、このまま第9波に至ることなく、早く収束することを願うばかりです。

大蔵 幹彦 (53回)

心臓血管外科研究室にお世話になって、来年で50年。この10年は訪問診療の世界でしたが、ここで常勤から週3回の非常勤になりました。



小林 米幸 (53回)

フレッシュマン出張した大和市立病院での2度の勤務を経て、市内に医療法人社団小林国際クリニックを開設したのが平成2年1月です。小児科医の妻(56回相当)と外科・消化器科・小児科を標榜していました。

た。オンコールからも解放され、ゆったりとした時間を過ごしています。コロナで中断していたジム通いを再開して基礎体力の維持を図りつつ、今後のことを模索中です。家庭では、3人の子供もそれぞれ独立し、5人の孫の成長を見守って

が、本年4月より長女(脳神経内科)が手伝ってくれております。院内で英語、スペイン語、タイ語、タガログ語、ベトナム語、韓国語に対応しており、月間の外国人患者は延べ3000人程度、患者全体の3割を占めるまでになりました。現在、日本医師会の外国人医療対策委員会委員を務めて3期目になります。なお、県医師会長の推薦を賜り、令和5年春の叙勲を受章しました。公社)大和市医師会会長を5期10年務めたことを評価していただいたものと考えております。



齊藤 英夫 (53回)

コロナ禍で社会生活が一変しまして東京への従来や会合ができず、長らくご無沙汰していました。近況を述べたいと存じます。お陰様で、夫婦ともども元気です。小生は団塊の世

います。「世間体にこだわらず、常に好奇心いっぱい、好きなものを追いかけて、相手と自分を誉めて、お洒落で素敵なワルになることを誓います」(渡辺淳一.. 熟年革命)、こんな言葉にうなずいています。



島津 二元秀 (53回)

ポストチーフ出張した国立埼玉病院の後は、藤田医科大学、慶應義塾大学、東京医科大学と一貫して大学病院に勤めておりました。2015年から町田市北部にある多摩丘陵病院に勤務しております。外科は

今井達郎前々院長の時からスタッフおよび研修医を医局から派遣して頂いております。当院は本年5月に近隣地に一部新築移転しましたが、その辺の事情は本号の「院長退任」の挨拶に記載しました。スタッフも少数です。未だに肝胆膵手術の前立ちをしておりますが、オペ室で若い外科医と交流できるのは幸せなひと時です。病院の隣がゴルフ場なので、65歳を過ぎてから本格的にゴルフを再開し、ハンディがアップしております。一緒に遊びたい刀林会員は是非お声がけください。



松原 了 (53回)

家族は妻と3人の男子です。73歳にして、あきらめかけていた初孫、男子が本年5月に生まれました。平成16年4月に厚労省を退職して、国立病院機構理事2年間の後、同18年7月以降

今日まで義塾のすぐ近くの三田国際ビルにある済生会本部で理事として16年間勤務しています。現在83病院と59の老人介護・保健施設と400程のサービssystem業務を抱え、常勤として平日は忙しく仕事に励んでいます。休日には同窓の仲間と大好きなゴルフを楽しんでいます。後期高齢期でも充実したプレーをするために足腰を鍛えています。頭をどう鍛えるかも課題です。マスメディアの偏った情報のみ頼ることなく、国際情勢や政治への関心の維持に努めています。



諸角 強英 (53回)

卒後11年目から30年間公立福生病院に勤務し、最後の12年間は院長を務め、病院建て替え工事を行いました。福生病院を定年退職後、平塚市病院事業管理者に就任しました。ここでは懸案となっていた平塚市民病院の救命救急センターを開設することに、経常収支を黒字化することができま



山田 好則 (53回)

生保会社と医療法人共同運営の同居自立型高齢者施設(四百名居住/三四会員も二人)の有床診療所(医師24時間常駐)にあり、塾の先輩後輩はじめ多くの先生方に応援いただいています。近くの東歯大市川病院は重要な連携先で、外科にも大変お世話になってます(ヘルニアからPDま

した。2021年3月で病院事業管理者を退任しましたが、最近同年代の訃報を聞く機会が増えてきて、丁度良いやめ時だったと思っっています。現在は慢性期の病院に週3日ゆったりと勤務しています。退任前から楽しみにしていた海外旅行などはコロナや円安などで思うようにできていません。また、ゴルフも飛距離が出なくなり、こちらも思うようなプレイができなくなりました。

で。当診療所は地域包括ケア病床的な役割です。術後回復期、緩和ケア等。80代で都内に通勤したり、ゴルフ・ジムに通ったりと、多くの元気な人たちに力づけられています。自分もまだ働けると妙な自信(錯覚?)。妻と二人暮らし。ゴルフ、スキー。近くに長女一家、医科勤務の長男は今年結婚。わが家の空き部屋は彼らの余剰荷物置場、そして孫の遊び場です。

追悼記

吉井信夫君 追悼

元東邦大学医学部第二脳神経外科教授  
(現東邦大学医療センター大橋病院)

上田 守三(47回)

私は大学時代、アイスホッケー、HAMと自動車  
で過ごしていましたが、工藤達之教授の脳神経外科と  
病態生理学についての講義  
の印象が強かったため卒業  
後工藤達之教授の教室に入  
れてもらいました。

当時CTが実用化される  
前で脳波は脳神経診断にあ  
たって重要な検査の一つで  
ありました。脳波を勉強す  
ることが必須と考え慶應病  
院脳波室に出入りを許さ  
れ、そこで吉井信夫先生に  
指導を受けたのが出会いで  
した。

吉井信夫先生は1959  
—1962米国に留学し臨  
床脳波とてんかん外科の研  
究をなされました。

臨床脳波に関する業績で  
は、頭部外傷、てんかん、  
ウイリス輪閉塞症、などの  
多くの疾患についての論文  
が発表されています。なか  
でも代表作は「脳波のとり  
方と読み方(1966,工藤  
達之、吉井信夫、南山  
堂)」で多くの医師の教科  
書として読まれています。  
さらに慶應医学部外科学工  
藤達之教授のもとで「極低

体温法(2—5℃)・頭部  
遊離による脳血流遮断許容  
時間の限界、脳代謝の検討  
—村瀬活郎—」を代表とす  
る低体温における脳機能、  
病態ついて多くの論文が作  
成されました。すなわち脳  
低体温療法のパイオニアは  
慶應脳外科といっても過言  
ではありません。吉井信夫  
先生が脳神経外科領域で最  
も研究されたのは定位脳手  
術であります。癌や視床痛  
患者に見られる「頭痛に対  
する定位的視床枕核破壊手  
術 剖検例による破壊巣の  
同定—安達一真—」を代表  
とする論文で当時視床痛に  
おけるパイオニアとして、  
またてんかんにおける  
Forell野破壊術の効果な  
どが日本定位脳手術研究会  
—日本定位・機能脳神経外  
科の前進—で発表されてい  
ます。手術は当時慶應病院  
手術場を使用できず精神医  
学研究所付属東京武蔵野病  
院で中浜博生理学の先生ら  
と共同で研究をなされまし  
た。

工藤達之教授の退任後、  
脳神経外科教室は後任をめぐ  
って激動に突入し吉井信



夫先生をはじめ共同研究を  
された先生方の極低体温、  
脳波や定位脳手術等の業績  
を後輩に十分伝達できずに  
吉井信夫先生は栗津三郎先  
生に誘われ東邦大学に移ら  
れました。  
現在の脳機能外科は画像  
解析、治療アプローチなど  
30年前に比べ格段の進歩で  
すが、伝統ある慶應義塾大  
学脳神経外科が脳機能に関  
するパイオニアの多くの業  
績を残してきたにもかかわ  
らず日本の脳機能外科領域  
の学会を牽引できる可能性  
を逸したのは残念でありま

今後の慶應脳神経外科の  
発展を期待し、吉井信夫先  
生に追悼の言葉を申し上げ  
ます。

故 梅園明君(32回)を偲んで

済生会宇都宮病院  
名誉院長

小林 健二(55回)

済生会宇都宮病院名誉院  
長、梅園明先生(32回)に  
おかれましては令和4年11  
月26日ご逝去されました。  
ここにあらためて追悼の意  
を表します。

梅園先生は昭和28年慶應  
義塾大学医学部を卒業さ  
れ、翌年慶應義塾大学外科  
学教室に入局、昭和36年に  
済生会宇都宮病院の外科医  
長として赴任されました。  
その後外科部長、救命救急  
センター所長、副院長を歴  
任し平成4年12月院長に就  
任され、平成11年4月院長  
を退任されるまで、寝食を  
惜しんで済生会宇都宮病院  
のために尽くされたといっ  
ても過言ではないと思いま  
す。その強力で類まれな  
リーダーシップ、指導力は  
他病院にも広く知られてお  
りました。医長、部長時代  
は一人でも多くの患者さん  
の信頼を獲得できるか、そ  
のために後輩、医局員には  
厳しく指導し、手術中にも  
ちろん術後管理にも、勉強  
をすることにも目を光らせ  
てこられました。手術の後、  
夜中の零時過ぎから始まる  
抄読会なども有名でした。

しかし他人に厳しいだけで  
なく、自分自身にもとても  
厳しい先生でしたので、厳  
しい指導に理不尽さを感じ  
ませんでした。後輩の成長  
を促すために心を鬼にして  
指導していたことが、のち  
にご自分が記された文章に  
残っています。梅園先生の  
39年間在職中の外科医局員  
は101人となりますが、  
多くの方が医師になりました。  
その時期に経験したこの厳し  
さは掛替えのない宝物だと  
思っています。学術面では  
胆道疾患の臨床研究に力を  
入れ、乳頭形成術、胆道内  
圧などに関する研究で名を  
馳せました。

かつては「日曜日は月曜  
日からの英気を養うために  
過ごす」と語られており、  
好きなオペラなどの音楽鑑  
賞を趣味とされていましたが、  
50代になってから始め  
たゴルフにも持ち前の集中  
力を発揮し、少しでも上達  
したいと取り組んでおられ  
ました。フランクに仲間と  
語りあえる時間が多くな  
り、梅園先生の別の一面を  
垣間見ることができたこと  
は後輩として幸せでした。



経営職につかれてからの  
梅園先生も、行政・医師会  
などとの関係を大切にしな  
がら、自分の理想に向かっ  
て突き進んでこられました。  
結果、昭和46年当時と  
しては数少ない救命救急セ  
ンターの設立、そして平成  
8年に新病院建築移転を果  
たし、済生会宇都宮病院を  
地域随一の高度急性期病院  
に成長させるに至りまし  
た。また対外的にも活動を  
広げられ済生会常任理事、  
栃木県病院長会会長、栃木  
県医師会副会長などの要職  
にも就いておられました。

私は卒後3年目の出張と  
昭和57年のチーフ出張後、  
40年間の長きに亘りご指導  
を賜りました。専修医、専  
門医、管理職の心得をその  
後ろ姿でご教示いただき、  
私の院長時代も進路に迷っ  
たときには「梅園先生なら  
どう考えるかな？」と自問  
自答したことが数多くあ  
り、心の指導者でありまし  
た。あらためて恩師であら  
れる先生のご指導に心から  
感謝申し上げます。  
梅園先生、94年間お疲れ  
様でした。安らかにお休み  
ください。本当にありがと  
うございました。

診療体系グループ紹介

腸班紹介



岡林 剛史(78回)

2023年度の腸班のスタッフは、茂田浩平先生(85回)、清島亮先生(87回)、私の3名になります。がん研有明病院スタッフとなつた松井信平先生(88回)のいた昨年と比べてスタッフのマンパワー不足は否めませんが、4人の男性大学院生と3人の女性レジデントと協力しながら診療・研究に取り組んでいます。腸班では、子育てをしながらもきちんと仕事ができるように業務の効率化を進めています。現在は、手術と病棟管理の担当者を週ごとに分け、完全なシフト制で診療を行っています。これから医療に求められるシフトの医療を推進する上では、各自が仕事を全うし、しっかりと申し送りを行うことが大切であることを日頃から指導しています。厳しい大学生活ではありますが、ワーライフバランスのとれた外科医として長く活躍するための礎を大学で築いていってほしいと思っています。

ロボット手術を始めとする低侵襲手術への積極的な取り組みが挙げられます。慶應病院には Da Vinci と Intuitive の2種類の手術支援ロボットがあり、大腸がん手術へ両機種の運用が許可されている数少ない施設の一つとなっています。また、潰瘍性大腸炎に対する一次的腹腔鏡下大腸全摘術では、体腔内で回腸嚢を作製し、人工肛門や切開創のない大腸全摘術を実現しています。

研究に関する最近の話題は、清島先生のオルガノイドを用いた新しい抗がん剤感受性試験が挙げられます。本研究の内容は、令和5年3月8日付、読売新聞夕刊の一面トップ記事となっており、社会的に大きな注目を集めています。オルガノイドとは臓器・組織を模倣した3次元構造体を指しますが、特徴的なのは患者検体から作成可能であることです。当班では55例の患者検体からオルガノイドの作製に成功しており、より臨床に即したドラッグ

スクリーニング法の確立を目指していきたいと考えています。大学における臨床や研究とは少し離れますが、関連病院の先生との交流も活発に行っています。腹腔鏡下手術に関する技術交流を年4回程度行い、2年間で10名の日本内視鏡外科技術認定審査合格者を輩出することが出来ました。また、約2年前から関連病院とMGHなど海外の施設とのデータベース共有を進めています。データベース共有は、関連病院を多く有する慶大外科のメリットをまさに活かすことができます。すでにこのデータベースを用いて6編の英文論文が執筆されました。このようにこのデータベースを活用し、関連病院に出張してもアカデミックワークを継続しても行うことも出来ています。

このような腸班の活動が出来ているのも日頃からの諸先生方のご支援のおかげです。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

ゆきはな診療所は、ご本人にとつては「人生の終焉」、ご家族にとつては「看取り」をお手伝いする診療所です。「死」を前にすれば誰もが不安、恐怖を感じます。誰かの死は日常茶飯事ですが、自分の死、家族や自分の大事な人の死は一大事です。不安は「これからどうしていいかわからない」「辛いことがいつぱいあるのだろうか」など漠然とした気持ちから起こります。これからどうするかは一人ひとりの選択があり、体のことでも心のことでも辛いことは一人で耐えることなく声にして助けを求めることができます。ゆきはな診療所は、これからどんな選択があり何がいいのかを一緒に考えること、辛いことをお聴きして和らげる治療やケアを目的にしています。

当院のホームページに載せた紹介文です。私は、外科医になってから人の生き死にの Quality of Life (QOL) について考えてきました。特にがん患者の診療から医師として人として「幸せ」「生きがい」と「悲しみ」を学びました。そして孔子の言う通り、五十にして天命を知りました。それが在宅緩和ケアでした。1993年卒業後、食道外科を学び1999年静岡赤十字病院に赴任しました。当時まだまだ普及途上だった内視鏡手術に邁進した一方で、徐々に進歩していた化学療法、終末期医療としての緩和ケアを探りながら行っていました。がん患者の生活、やがて亡くなりゆく患者、その家族のQOLとは何かを考え、ひとつの答えとして早期からの緩和ケアと在宅看取りにたどり着きました。院内に緩和ケアチームを立ち上げると同時に、院外で医師会や行政に働きかけてがん患者診療の地域連携システム構築に奔走しました。そして、在宅療養が当たり前の選択となつて来た時に自分自身も在宅医になろうと決心しました。病院を退職する決断の背中を押したのは、義父の死(享年64歳)でした。

妻の父には生前大変お世話になり、義父の住む島田市は自分にとっては第二の故郷と思っていました。2019年2月、義父はステージ4の肺癌と診断されました。積極的治療をできる体力もなく、私が主治医となり緩和ケアを行い、家で過ごしたいという望みを叶え自宅であらかに亡くなりました。大切な人が亡くなるたびに、彼の人生に付き添って「一緒にいれてよかつた」と周りの人が思えるような支援がしたい、それは自分のことよりも周囲の人に気を遣っていた義父からのバトンでした。2021年7月1日、島田市にゆきはな診療所を開業しました。スタッフは看護師3人、薬剤師1人、事務方1人、私の6人です。早期からの緩和ケア外来(治療中の支援)と終末期の在宅ケアの2本柱で、近隣の総合病院、訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所、調剤薬局と連携し「(華(はな))の面影宿すかな 吉野 弘」

開業

ゆきはな診療所 (静岡県島田市)



白石 好(72回)



慶應義塾大学病院 外来 外科担当表

Table of clinical departments (Neurological Surgery, Respiratory Surgery, Cardiovascular Surgery, Pediatrics) and their respective staff members.

Table of special clinics (Special Outpatient Clinics) including various medical services like endoscopy, liver transplantation, and internal medicine.

Table of staff members and their clinical rotations, including dates and names of staff.

計 報

刀林会ホームページがアクセスしやすくなりました。
外科学教室 ホームページにアクセス
http://keiosurg.umin.jp/
同窓会 をクリックしてください。
ID、パスワードの入力の必要はございません。
よろしくお願いいたします。

刀林会会員管理システムについて
郵便物発送先、一斉メールにてのお知らせなど「刀林会会員管理システム」にておこなっております。
メールアドレス、ご勤務先、ご自宅住所などのご変更があった場合は、ご自身にてアップデートしていただくことをお願いいたします。

開業についてのお知らせ
開業の際は、同窓会へご連絡をお願いいたします。記念に刀林会より盾を進呈いたします。
よろしく申し上げます。
＜刀林会 事務局＞
〒160-8582 新宿区信濃町 35
慶應義塾大学医学部外科同窓会事務局
TEL : 03-5363-3800
FAX : 03-3359-9130
tourin-h@keio.jp

Table of special clinics (腫瘍センター外来) and staff members.

Table of editorial board members (編集委員) and their names.

編集後記
3年間にわたる目に見えないCOVID-19に脅かされる日々が巷では急速に昔のことになりつつある。医師のくせに私もそんな気がする。先日、対面にて行われた刀林会総会そして懇親会では、久しぶりの再会を喜ぶ姿が人の輪が時間いっっぱい無数に現れては消える、賑やかな会となった。やはり対面での酒を酌み交わしつつの会は何物にも代えがたい、と言うのは人間の本質のひとつではないだろうか? いろいろ考えさせるCOVID-19である。
A・F

刀林賞募集
刀林賞は、刀林会の以下の優れた業績に対して授与されます。奮ってご応募ください。
1. 臨床的研究
2. 臨床上、有用な基礎的研究
3. 医学上の社会活動に関する研究
4. 本会の発展に著しく貢献したと考えられる業績

3. 刀林会会費完納者
ただし、医学上の社会活動に関する研究、本会の発展に著しく貢献したと考えられる業績に関しては、応募資格1、2の限りではない。
応募方法
1. 毎年7月1日から11月30日までの間に、応募用紙(ダウンロード)を用いて応募する。
2. 前項記載の応募用紙は、本会ホームページ記載のものをダウンロードして用いる。
3. 応募者の指導者ないし、指導教授1名の推薦状(書式: 応募用紙中)を要する。
受賞者は、6月の総会にて表彰されます。また、刀林新聞に論文の概要が掲載されます。
選考方法などは、刀林賞規則をご参照ください。